



それが
なんで小
田原に来
たかとい
うと、戦
国時代の
天文二十
二年(一
五五三)武
田信玄と
北条氏政、
今川義元

ルーツは山梨の市川大門
鮑屋(あわびや)というのは屋
号で、イコール市川家です。私は
昭和二十二年(一九四七)生まれ
で、六九歳になりました。十七代
目当主になります。

一心太助は鮑屋でい



第248号
発行所 小田原史談会
小田原市東町 1-21-18
平倉方 TEL (34) 8363

話し手 市川 孝夫

が甲・相・駿の三国同盟を結び、
その次の年に信玄の娘の黄梅院
が氏政に輿入れに came。人質で
すわ。それで武田勝頼のところ
には氏政の娘が行った。その時
に、甲州には鉾物(鉄、銅)があ
る、小田原は鉾物がないが水産
の塩と海産物がある。向こうは
寒くて農作物が不作の時もある
から農水産物を向こうにやって
鉾物を小田原に持って来ると。
そこで、うちのご先祖は商人と
して甲府から来たと思うんです。
海産物は塩漬けなどにして送
られましたが、鮑は樽に醤油と
共に詰められ馬の背にゆられて
甲斐に着いた頃には熟成された
味となったそうです。

鮑屋六左衛門

うちは代官町の無量寺(天正元
年(一五七二)創建)の檀家で、過
去帳には寛永九年(一六三二)の

「市川六左衛門」という名があ
るんです。代々の当主は六左衛
門、幼名は崎次郎です。

私が我が家の歴史をまとめて
みましたので聞いてください。

江戸の初めはまだ小田原城下
の町割も出来てなくて、魚を商
うことも単独の網元や漁師のみ
で対応が出来ず、他の浦まで集
荷し販売するという魚問屋もな
かったようです。したがって
店をもつ者もなく、我が家のご
先祖も魚座や浜で直接買った魚
を村々へ売り歩く「振売り」すな
わち行商でした。

寛永になって稲葉の時代に町
割や城内が整備されてくる頃か
ら、網業、引き子、魚商などの役
割分担がすみ、真鶴、岩、米神
をはじめとする魚場をとりまと
めるようになってきたようです。

五代目の六左衛門になると殿
様(大久保忠朝)から藩内の鮑を一
手に引き受ける御用商人に指名
されて、鮑の販売の実権を握っ
て「鮑大臣」という異名をとり、
そのとき「鮑屋」という屋号をも
らったと聞いています。

当時、この地方で獲れる鮑の
全ては鮑屋を通さなければ売買
出来ぬと禁制本札がたてられ、
厳しく取り締まられました。水
揚げされた鮑は全て城中に献上
し、献上済の印判を受けた後、競
り市を開いて売っていたのです。

二百四十八号(平成二十九年一月号)

目次

《老舗訪問》
一心太助は鮑屋でい

市川 孝夫…………… 1

小田原の

「懐かしい映画館」を追って

平倉 正…………… 6

小田原桐座について(八)

―川上音二郎乱闘事件の真相―

荒河 純…………… 11

沖繩の二宮金次郎像調査日誌

あしがら一円塾 露木 順…………… 14

平成輔と小田原

野村 朋弘…………… 18

小田原の郷土史再発見

広島にある氏直の墓

石井 啓文…………… 22

片岡日記 昭和編(八)

片岡永左衛門…………… 26

忘れられた地名(三)「早川上水・鍋町」

杉山 虔…………… 21

旅のつれづれ俳句日記

劍持 芳枝…………… 29

七十年前の「小田原廻り」再録

史跡巡り報告…………… 29

甲斐路史跡と美術館…………… 30

第十五回史談会セミナー報告…………… 25

第十六回史談会セミナー予告…………… 25

新入会員紹介…………… 18

特別賛助会員…………… 32

落穂集…………… 31

鮑というのは高級物で、貴重品として将軍に献上しました。伊豆も大久保の領地でしたから下田・稲取の鮑、またこの近くで言えば真鶴・片浦で採れる鮑やサザエその他の類ですね。それらを江戸に持って行ったんです。ルートの帆掛け舟で三浦半島の向こうを廻って日本橋までそのまま舟で入って行った。もうひとつのルートは三浦半島を葉山辺りで横切ったから荷車で江戸まで持って行ったといひますね。

文政の頃には、真鶴村の五味台右衛門という人が「ねこそぎ網」(大小の魚を漏らさず獲るといふ)を張りまして、十二代目の鮑屋六左衛門はその獲れた魚を手こぎ舟で小田原に運んで販売することを委託されたんです。十三代目になると鮑屋は漁業にも手を広げて、小田原近郊に網を張るばかりでなく、遠くは房州にまで及んだそうです。

小田原の鮑といえはこんな話があります。三代将軍の家光が上洛の途中、小田原に二日泊まったんです。その時細川忠興という人の記録(「泰応公年譜」)では、将軍が小田原の大蓮寺浦の浜で泳いだといふんです。家光は二十歳、付き添いで来たのが細川忠興や柳生宗矩。その時に海人が鮑を採っているのを上覧した

と本に書いてあるんですよ。

明治二年の借用証文

とにかく小田原というのは江戸時代から何回も天災や火事がありました。殆ど古文書というのはいないんですよ。うちにもあまり記録がないんですが、こういう借用書(後掲資料)が残っています。

明治二年(一八六九)に岩村の魚場が不漁で金に困って、村の顔役たちが金策のため鮑屋六左衛門に借金を申し入れたんですね。そこで六左衛門は無利息で数回に渡って融通して岩村の困窮を救ったというのです。そのためか、うちと岩村とは明治の中期まで特別の関係を保っていたそうです。

うちは網もやって、明治時代に岩のチヨウゴ(現在の料金所の先あたり?)というところに網を張っていたという。あそこから泳いで小田原まで戻って来たとかそんな話もありました。チヨウゴでとったものは小田原に持って来てうちの台所で処理して、持って来た漁師はうちで朝飯を食っていったと聞いています。

ところが栄枯盛衰で、おじいさんから聞くと、明治十六年(一八八三)に没落しちゃったという。網元で今も残っている人は誰もいない。不漁や、台風が来て網が

流されたとか色々ですね。

それで普通の代はみんなそこで職業替えしちゃったんですよ。だけど先々代と私のじいさんが頑張ってくれた。昭和九年(一九三四)まで借金していたって言いますよ。

ひい爺さんとじいさんと親父

先々代のひい爺さん(六左衛門)は慶応元年(一八六五)生まれで、私が小学校六年の時、当時で九五歳でした。小田原の最年長者で表彰されたんです。場所は今の市民会館、あの真ん中にかまぼこ図書館、中央公民館があつて、この時に初めて小田原で老人会というのが出来たんですよ。その第一回目の老人会で、先生から「市川、お前これ読んで来い」と言われて文章を読みあげた、そんな記憶がありますよ。

じいさんの名前は敬太郎といふんです。明治二十三年(一八九〇)生まれですけど、まだ十いくつで戦争行って、日露戦争の時は甲府の三十六連隊に入つて、その時の軍医長が森鷗外だったそうです。敬太郎のおばあさんがお菊さんと言って江戸の大奥女中だった。それでじいさんは三味線や唄をやつて、自分で小



後列左より 三郎、六左衛門、敬太郎、
前列左より 許、タカ、ヤス

唄を作つたり、踊りまで振り付けるぐらいで、綺麗な遊び方をした。和歌や俳句も詠んだ。囲碁では小田原で最高の六段までいってました。小田原にJTBが出来て旅行会の会長をやつたり、じいさんは小田原に商売じゃなくて顔売ったんですね。

料理屋の「だるま」の広澤吉蔵という人は敬太郎の弟です。そして吉蔵に子供が出来ないといふので母の妹が行っている。だから鮑屋から二人「だるま」へ出ているという関係です。

鮒(ぶり)は私が小学生の時、昭和三十年頃が一番獲れましてね、特に五ッ浦なんて一日に三万本も獲れたとかね。五ッ浦の網は「だるま」とうちと山橋さん

たちが一緒に会社をつくって持ってたんですが、じいさんは「だるま」の弟に全部任せてました。じいさんに比べれば親父(三郎)

はもう仕事だけだったからね。親父は養子で、今倒産しちゃったんですがヤオハンの三男坊です。結婚して母(許(もと))が身ごもった時に新婚二ヶ月で戦争行っちゃって、姉は五歳まで、昭和二十一年にインドネシアから復員するまで父親の顔を知らなかった。私は二十二年に生まれ

たわけです。戦後はしばらく配給制度で、それからまた東京の築地が活性化されて、親父は築地まで行って鮭とか鱈子とかの加工品を買って小田原の一般の魚屋さんに売ったと言います。

親父はね、酒ものまなきや何もしなくてね。夜は八時半には寝ちゃって朝の二時には起きて市場に行って、本当に仕事一筋の人間でした。

性格からいうと、じいさんと親父のが半分ずつあればいいと思いますね。私は中学からじいさんと歌舞伎座に一緒に行ったり、末広に行つて落語聞いたりね。じいさんは頭のいい人でなんでも答えるんですよ。父はそういう趣味もなんにもない人でした。

関東大震災で家は壊れ、無量寺の境内でしばらく過ごしたそうです。当時母は四歳でしたが「東京の親戚(じいさんの兄弟)はいい生活してるのに、ひもじい思いをした」と言っていました。母やその妹などは昭和の初めにリング箱で勉強したっていうんです。だけど戦後に父が復員してから頑張つてこれだけのものを作ってくれた。私は父の背中を見て商人道を学びました。父には感謝してます。

スーパーに卸したら袋叩き

私が大学を出たあと、時代が変わって魚屋さんでなくスーパーの時代がきました。一般小売の水産の人たちが、スーパーというの是一般小売の敵だということ、(うちがスーパーヤオハンに売ったので)うちは小田原の組合にポイコットされちゃったことがありました。「二百円のイカを鮑屋がついていてヤオハンで百円で売られりゃ、俺たちの生活はどうするんだ」というわけよ。箱根や足柄にはヤオハンがないから影響がなくていいんですけど、小田原の市内に小売の魚屋が百六十ぐらいあって、どこも鮑屋の荷物をなんにも買わなくなつてしまった。だけど、ヤオハンが当時は下田まで九店舗

ぐらいあったから、うちは持ちこたえたんですよ。

小田原だけで消費出来ないものは「オツカケ」って言いましてね、東京や横浜に仲卸がすわけ。そうしないと小田原が底値、安値になっちゃいますから。そこでやってたのがうちのお得意さんで、朝獲る魚を朝七時半までに大森の市場に持つていくと朝獲りというかたちで売れた。そういうのを「オツカケ」というんです。その当時鯉でも鱒でも、例えば五百円で買ったのが七百元、八百円で売れた。それと干物屋さんに魚を供給してました。それで鮑屋は飯が食えるんだという、そういう時代が何年も続きましたね。

ヤオハンの時代が終わって

ヤオハンが昭和五十七年(一九八二)に上場をしまして、なおかつ沼津のところはセンターを作り本部もそこに移つたものから、沼津、焼津、清水などから商談に来るようになって、鮑屋だけでやってたヤオハンに他が入ってきた。

うちがそれだけの力があればいいんだけど、例えば一〇ヤオハンに商談に行つてキャンセルされても他に一〇売れるから商談が出来るけれど、ヤオハンが二〇の力になったとき、うちは

二〇の商談を蹴られたら二〇を売るには何ヶ月もかかってしまう。ヤオハンは一〇用意できる間屋とつきあうことになる。という話になってきましたね、うちだけだったものがウチだけではなくなつてしまふわけですよ。それで色々なことを考えました。その間に十年ぐらい経つたら小田原の商圏の中に別のスーパーが入つてきて鮑屋はヤオハンだけという時代は終わつてしまった。また魚屋さんが一部買い始めて来たりしましてね。

当時昭和四十年代にやりはじめた時はFAXも携帯もない。すると私なんてが電話のそばに居なければお客さんを逃がしちゃう。例えばスーパーで、「明日〇〇が欲しいんだけど、明日いくらかね」と聞いてきたら、相場を答える人が居ないといけない。「(鮒が)キロ五百円だったら五ケースくれ。そのかわり七百元だったら二ケースにしてくれ」とね。そうすると、朝四時からは私が必ず居なくちゃいけない。だから毎朝三時半に起きて必ず夜九時まで居て、夜九時頃のテレビなんかは見たこともない。それに私はお酒は飲みませんからね、三十五歳まではゴルフもしなければ、なんにもしない。ただ働いているだけ。こんな

人生で良いものかと思いましたがね。

香港にも進出したが

そんな時に海外からモノが入るようになりましてね、これからは中国だと香港に会社を作った。当時ベトナムは日本と国交がなかったんですよ。ベトナムから来たカーテンを香港でメイドイン香港にカーテンごと替えちゃうわけ。それで香港がシツプアップして出す。それで香港に目をつけたわけ。三十九歳の時でしたね。

だけど普段毎日輸出する商品はない。じゃあ香港で何をするかというと、岩田という昔東京オリンピックの時に猪熊と戦って中量級で負けた人がいて向こうの柔道の先生やっていた。「市川さん、香港の学校給食はおかずに困ってる。文部省を動かして・・・」「ようし分かった。それじゃあここで魚屋を開こう」とね。そんなことで私は昭和五十九年から二〇年近く香港に出かけてました。

また、「鮑屋東京」という会社を作ったり、小田原だけでは情報が疎いからといって東名のインターの川崎の北部市場に「川崎鮑屋」っていうのも出店したんですが何もメリットがなくてね。昆布なんてのは他の問屋さ

んと同じものを売ってるわけだから鮑屋から取る必要ないんですよ。小田原は地の物があるから、それで生きていられるということがありますね。で、十二年前に香港も東京もやめて小田原に戻りました。

親父は五年前に九十六歳で亡くなりまして、妹が社長で、九年前に息子が入社しました。息子は将史(まさし)って言いますが、水産大出て、これが十八代目になります。三十七になったのかな。

私は会長やってます。「もうお父さん何もなくていいよ」「ただ、いるだけでいいよ」と。ただ、いろんな経験がありますから、アドバイスしたりしてます。

問屋の機能

問屋は他人の物を右から左に動かすというのですから、オリジナリティがなければ力が強いところに負けちゃうわけですよ。

問屋っていう業務自体がもう不要になってる。メーカーが直接センターに持っていけば中間業者がいらないんですよ。昔は縦割りで、市場があつて問屋があつてとなつていたけど、もうこれが要らなくなっちゃってる。今は、「物流を制する者が流通を制する」という時代ですよ。だから大手は共同の配送センター

造って、一緒に持っていくとコストがこれだけ掛かりますよと、商圏の真ん中でやれば二台出さないで一台で出来るとか、そういうのも一つの機能です。

あとは支払い。「お宅はいつが締めで支払いはいつですか」「十日の締めで十五日に払います」「うちは十日で二十日の支払いでいいですよ」となると、五日間で金利が違うとか、そういう機能でうちは安い方がいいんだとすると、そっちはうちに合った機能を持つているとか、資金的に余裕があるからとか、そういう問題なわけよ。

小田原の魚は新鮮かつ安い

小田原の市場に行きたいというのとは何かというと、横浜や築地はどんなに新しくしても一日前、二日前の魚だけでも、小田原は朝獲った魚ですよ。特に鰯とか鯖や鰹の「青物」は一日経つと全然違うんですよ。ワラサ、イナダなんてのもね。イサキとかタチウオなんかはかまわないんです。例えば横浜の市場の競りでキロ七百円の鰹が、産地直接でうちに買いに来れば五百円に口銭を加えるだけで六百円に合います、小田原で買うと安く買える、なおかつ鮮度がいいと、そういう売り込み方をするわけですよ。

最近の小売屋さん

小売屋さんに売る力がなくなってますね。鰹を一日十キロ売れない。小売の魚屋さんが市場で二キロ、三キロで分けてる。カマスを十キロなんていうと一週間も保つ。

酒匂川のそばのある魚屋さんが「鮑屋さんよ」と言うわけ。「東にスーパーが出来たら東から来るお客がいなくなっちゃった。一年経ったら今度は北にスーパーが出来ちゃった。そしたら北の客が来ない」と。「この数年で東西南北、うちはこの真ん中にあるんだよ。お客が来るわけないじゃないか」。まあ、そういうふうな話ですよ。

魚屋さんも順番になくなって、同年輩で七十歳ぐらいの人が「鮑屋さん、やっちゃったあとお五年前だよ」と言っていました。やめるのはきつかけが必要で、旦那が足が悪くて動けないだとか奥さんも膝関節が悪いとか。なにせ床はコンクリで、いつでも水を流してるからね。嫁いで四十年にもなつて、「魚屋やめてこれから余生はゆっくり旅行に行こう」とか、「お父さんどっちかが倒れたらやめようか」とっていうのが一つね。

その次は、魚屋だから保冷車で運ぶわけ。車を替えなくちゃ

いけないとなると二百万もかかる。これから一日何万円か稼げないのにどうだろうか、出来るのかと。後継はもう好きなどころに勤めているんだね。

それからもう一つはシヨークースで、水があるから錆び付いてこれに百万円もかけてどうだろうかとなる。そういうきつかけでやめようかとなるんですよ。

アオリイカの塩辛など

うちでは五年前に魚の加工も始めたんです。他には無いオリジナルなものを作ろうと。その一つがこれで、日本で最初のアオリイカの塩辛なんです。アオリイカってのは刺身のイカなんです、うちが初めてこのアオリイカの塩辛を作りましたね。

吞兵衛の塩辛は塩と真イカのワタだけなんです、それを作るのは日本に何千社ってある。小田原だって蒲鉾屋さんは全部真イカの塩辛持ってます。だから、とにかく変わったことをやらなくちゃいけない。それでアオリイカってことで業界紙でもすごい好評でした。百人のうち百人が美味いってわけよ。これを幕張やお台場でやるシーフードフェアで、世界のバイヤーやスーパリーや通販ギフトも含めて来た人たちに試食してもらおうと、こんな美味しい塩辛初めて食べた

と言うんです。一度食べてみてください、全然違いますから。その特長は、アオリイカを生きてるまま加工してると、鍋でワタを焼くんなんです。すると、食べていても酵母でワタから水分が出ないから歯ごたえがいい。子供が食べられる味付けで、逆に言えば「塩辛じゃなくて珍味だな」と言う人もいますよ。

もう一つ、これは魚の煮付けなんです。ビン詰めにした煮付けはうちが日本で初めてなんです。この材料が金目鯛なんです。お客さんは値段が高くても納得してくれています。他にも数種類作ってますよ。

一心太助は鮑屋がモデル
ここをちよつと読んでください。「サンデー毎日」に載っている一心太助です。知らせてきてくれた人がいますよ。

講演なんて作り話だけど、相模小田原の老舗の魚問屋「鮑屋」の主人が太助のモデルだそうなんです。一心太助が大久保彦左衛門のお屋敷に出入りを許されて小田原から来た魚を卸したという物語です。昔、中村錦之助が一心太助をやっていた。よく見たもんです。月形龍之介もこんな姿でした。

私はこういう性格だから、友達に「市川に悩みがあったら世の中に悩みがない人はいねえ」と言うんだけど、「何を言ってるんだ。俺この腹切って見してやりてえや」と思うね。とにかく、喧嘩したこともなければ怒ったこともないし、こういう性格だから、「なんにも苦労してねえよ」と言われるけども、「冗談じゃねえわ、もう本当にお前ら勝手なことやって」なんてね。

敬太郎じいさん(号「二舟」)が十何人の孫たちを集めて喜寿のお祝いしたときに、「市川の流れを受けて十五代 代々(よよ)に亘るも水は枯れまじ」という歌や、「世の人の恵みを受けて今日の幸(さち)」というのを詠んでいます。私もいくらかはじいさんの心境がわかる年齢になってきましたね。

【資料】
差入申規定證書
当村像(むらかた) 往古ニ基漁業開演御免(ゆるし)ニ相成、然上ハ魚荷物賣捌方小田原弁利之儀、殊ニ先年分鮑問屋之株式も有之、猶当物差送來候縁合も御座候ニ付、此度貴殿江御無心申問屋賣捌方御頼候処、早速御承知被下忝存候、就而ハ外魚問屋之振合ニ順シ御約定相違無之候、尚又仕入与して金

三百両之借用仕候處実正也、返済之儀者根拵網(ねこさいあみ) 水揚魚賣高之内式割之当ヲ以追々返金可致候、若又村内ニ而心得違之者御座候ハハ、其時々村役人分急度申付御約定之通為差出可申候、猶以來外魚問屋之御振合通何連も御取斗被成候、其節違乱申者無之候、為後日證書入置申、依而如件
明治二己年四月



(カット・田中豊)

- 相州岩村
 - 百姓代 中嶋米三郎
 - 組頭 青木庄兵衛
 - 同 半田治兵衛
 - 名主 半田庄右衛門
 - 小田原代官町
 - 市川六左衛門殿
- (二〇一六年十月八日)
(文責 青木良二)

小田原の「懐かしい映画館」を追って

平倉 正

映画の発明と普及

「映画」が発明されたのは一八九五(明治二十八)年、フランスのリュミエール兄弟が十二月二八日にパリで一般公開した「シネマトグラフ」が最初とされています。少し遅れてアメリカのエジソンも、「ヴァイタスコープ」という映画を発表しています。

日本に映画がやって来たのは、二年後の一八九七(明治三十)年でした。フランス留学経験のある稲畑勝太郎がリュミエールから「シネマトグラフ」を買い付けて二月十五日から二十八日まで大阪南地演舞場で公開したのが嚆矢とされています。

当時の新聞記事によれば、その上映作品は四十本ほどで「五階建ての建物に並んだニュー・ヨークの街頭」「駅の雑踏と汽車の走る様子」「パリのダンスホール」「ロンドンのテムズ河畔」「北海の荒波」といった内容だったようです。ヴァイタスコープは大阪の荒木和一が買い付けて少し遅れて大阪南地演舞場で二月二十二日から三日公開したとされています。東京では同年三月八日、神田

三崎町の「川上座」で、三月九日には横浜住吉町の「湊座」で公開されています。

名称は「映画」ではなく「自動写真」、「自動幻灯」などと言われていましたが、やがて「活動写真」に落ち着きました。「活動写真」は専用の上映場所を持たず、映写機器、説明者、楽団などをまとめた巡業隊が、全国の町の芝居小屋を、三日から五日間の期間限定で上映して廻っていました。

しかし、輸入された五、六十本の活動写真はやがて底をつき不足状態となります。そこで明治三十二年に駒田洋好が「芸者の手踊り」を撮影した日本初の記録映画を製作し、九月には日本初の劇映画「稲妻強盗」を製作します。当時の名優市川団十郎の舞台「紅葉狩」もこの時期製作されます。

小田原で一番古い劇場

映画より芝居の方が歴史は古い。映画がまだ発明されていない時代から町には劇場、芝居小屋があったはずだ。

石井富之助氏の著作「明治以後小田原劇場物語」によれば、小田

原の劇場で一番古いのは寺町に建てられた「桐座」とされています。寛文六(一六六六)年にはその記録があり、小田原だけでなく関東一帯の劇場の中でも最古の小屋とされています。しかし「桐座」は大正十二年の関東大震災で倒壊し、長い歴史の幕を閉じてしまいました。

明治九(一八七六)年には、旧茶畑に「鶴座」という劇場が建てられますが、同座は明治二十八(一八九五)年に焼失し、再建されませんでした。

松原神社のある宮小路には、明治十四(一八八二)年に「幸座」が建てられます。「幸座」は明治二十六年に「若竹座」と改名し、さらに明治二十九年に「富貴座」となります。「富貴座」は大正四(一九一五年)に映画館となり、昭和三十三年(一九五八)年に焼失閉館するまで小田原の人々に愛され続けました。

大正八(一九一九)年になると幸町に「御幸座」が開場します。こはもと小田原藩の牢屋があったところから牢屋町と呼ばれていました。大正の初めには幸町と改められており、その名にあやかったのです。長い間芝居中心の興行を続けてきましたが、昭和十五年にはここも映画館となり、昭和五十九年に閉館しました。

江戸から明治、大正にかけて主

な小田原の劇場を眺めてみましたが、これらは歌舞伎、浪花節(浪曲)、奇術などをかける芝居小屋であって映画館ではありません。では小田原の人々はどのようにやって映画をみたのでしょうか。

小田原で最初の映画館

日本中が活動写真に沸く明治末期、わが小田原の町にも初めて活動写真がやってきました。昭和二十二年の「小田原の映画五十年史」(安藤正作)によると、小田原で最初に活動写真が公開されたのは明治三十五(一九〇二)年「豊田亭」と記されています。「豊田亭」は万年町にあった寄席で、巡業隊による上映だったようです。

小田原ではありませんが、巡業隊の様子を綴った文章があるので紹介します。

(怪人活弁士の巡業新聞・前川公美夫)

舞台には大きな布が正面にははられていて、その左側に弁士席があった。弁士席にも白い布が掛けられていて、その上には水差しがのっていた。この舞台正面の大きな布に写真が写るのだが、舞台の正面に相對するようになっている。観客席の最後部に映写室が出来ていて、映写室から時々光が照射されて、機械のレンズの正確な位置を定めていた。映写室は二間四方くらい、四坪か三坪ほどで、その中に映写機、巻返機、その他必要な機械が据え

られていて、その他映写が始まると映写技師、助手などが入った。その時舞台左手から金のピカピカ光る鼻眼鏡をかけ、黒のガウンを着た弁士が悠然と現れた。満場は万雷の拍手喝采だった。

する事となりしが、前景気頗る非常に盛なり」という記事が見えます。富貴座はその後も、歌舞伎、新派、浪花節、奇術などを上演しながら、時折活動写真の興行を行っていたようです。

「小田原電気館」の登場

映画に関する一番古い記事は、明治四十二年六月の「横浜貿易新報(今の神奈川新聞)」に見られる。それは「豊田亭」ではなくて富貴座で行われた巡業隊による小田原での興行を伝える記事でした。「幸町富貴座は都四郎打上以来活動写真などを掛け居りしが、二十七日より旧俳優一座にて蓋を開ける」とあるが、作品名などの詳細はない。ただし、翌年の五月の記事に「小田原町宮小路富貴座にて二日より五日間、午後六時よりパター大洪水の活動写真を興行

「当時私は小学校も上がっていない頃であったが、父に連れられて見に行った。(中略)弁士が声色で説明していた。(中略)場面が終わることに坂(*拍子木)が入って暗くなり、次の場面が現れるという風で、弁士もピリケンというのや女の弁士も居て総勢五人くらいだったように覚えている。」(石井富之助「明治以後小田原劇場物語」)

日本中に広まると、その影響力を示すような大きな社会現象が起きます。明治四十四年十一月に公開された「探偵奇譚ジゴマ」です。探偵ボーリンと怪盗ジゴマの対決を描いたこの映画は続編も含めて日本中で大ヒット。あまりの好評さから類似の品に「ジゴマ」の題名をつけた便乗作品まで現れ、和製ジゴマ作品や人気作家による小説ジゴマが出版されるなど日本中が「ジゴマ」に熱狂しました。あまりのブームが青少年に悪影響を与え、ジゴマを真似た犯罪が発生するなどから上映禁止になった地域もあるなど、大きな社会問題となりました。

なければと思うのに、建物や設備の欠点が指摘される有様。しかも弁士の技量が「……声色がまるで駄目なうえ、西洋物の説明でも漢語沢山は困る……大正館は先ず弁士を取り換える必要がある」と新聞に書かれる始末。

「日本の青春」(68年東宝)、「サングカン八番娼館・望郷」(74年東宝)などのシナリオで知られる小田原出身の脚本家・廣澤榮も「私の昭和映画史」で、当時の活動写真館の様子を紹介しています。

当時の映画界について眺めてみますと、日本中を沸かす大スターが現れます。「目玉の松ちゃん」こと尾上松之助です。松之助は「地雷也」などの忍術映画が特に大人気で、日本中の子どもの間で「忍術ごっこ」が大流行しました。大正十五年に亡くなるまで千本以上の主演作が作られました。活動写真が新しい娯楽として

大正時代に入ると、活動写真は、物珍しい記録映画からスターが登場する話題作になって、社会現象になるほど一般庶民にも熱狂的に受け入れられるようになります。事件や舞台をそのまま写せばよかった時代から、監督という作者が現れ、スターという演者が現れ、主張をもった映画が作られるようになったのです。

「その当時の小屋は椅子席などではない。畳を敷きつめた升席であった。(中略)スクリーンの前のオーケストラボックスで直属の管弦楽団が「バグダッドの盗賊」などの曲を演奏していた。管弦楽団といってもせいぜいピアノ、バイオリン、トランペット、クラリネットに三味線と太鼓が加わるという奇妙なものだったが、私はもう期待感に胸をどきどきさせていた。(中略)スクリーンに向かって真ん中のところが三尺ほどの細長い板敷になっていて、それを境に左側が男子席、右側が婦人席になっていた。婦人席の後方、入口に近いところを一段高くして、警官のためにしつらえた席があった。つまり暗がりの中の男女の風紀、また弁士が治安維持法違反の発言をしないかというチェックのためと後年になってわかったが、そのころ私は、お巡りさんは



小田原電気館(1912年)

あんな特別席でしかもタダで活動を
見られていいな、と思うだけだった。

約十年後の関東大震災の後に
建てられた「復興館」についての
文章ですが、当時の映画館の平均
的な様子と思われまます。事実、筆
者も戦中に警官指定の臨検席が
「東宝館」にあったのを覚えてい
ます。

未曾有の大震災、関東南部を襲う
大正十二年九月一日、関東の南
部を大地震が襲います。関東大震
災です。

マグニチュードは七・九、被害
は東京横浜中心に死者九万一千
人余り、行方不明者四万三千人余
り、全壊・半壊家屋それぞれ十二
万余戸、焼失家屋四十四万戸とい
う凄まじい数字が残されています。
小田原の被害については、「小
田原市史」に次のように記されて
います。

足柄下郡の被害は「最モ甚大ニシテ

各町村」にわたり、そのうち小田原町
は被害が「最モ甚大」で、ほとんど「全
滅ノ状態」であった。

この未曾有の災害で小田原の
すべての劇場、活動写真館は軒並
み被害を受けます。「吾妻座」は再
建されず、その土地は長い間空地
となります。(昭和二十一年に開館し
た「オリオン座」はこの土地に建てられ
ました。)

残った「富貴座」はすぐにバラ
ックを建て松竹作品の上映を続
け、劇場の「御幸座」もまもなく
再開されます。

さらに約四か月後の十二月二
十九日には、日活と契約した「復
興館」、帝キネと契約した「娛樂館」
の二館が開館するなど、復興にか
ける小田原の人々の娯楽となり
続けました。

しかし、「娛樂館」は大正十四年
七月に「帝国館」、昭和元年頃に
「電気館」と改称し、昭和二年頃
「昇竜館」という寄席になったの

ち昭和六年の九月に
火事で焼失してしま
います。残った映画館は松
竹系の「富貴座」、日活系
の「復興館」となり、昭
和十三年十二月に「小田
原東宝館」が開館するま
で、この二館が上映を続
けることとなります。



富貴座 (1915年)

トーキー

大きな技術躍進

昭和六(一九三二)年、日
本初の本格的トーキー
「マダムと女房」(松竹キネ
マ)が公開されました。こ
の作品はその年のキネマ
旬報ベストワンになり、
その成功は日本映画のト
ーキー化を一気に押し進
めることとなり、映画史
上の大事件となったのです。

トーキーになれば弁士や楽団
が必要とされなくなります。各地
で弁士の反対運動が起こりまし
たが、時代の波には勝てませんで
した。ほとんどの外国映画も「字
幕スパー」をつけて、観客は俳
優の生の声が聴けるようになり
ました。こうして日本の映画館か
ら弁士が消えていったのです。

小田原では「富貴座」がいち早
くトーキーを採用し「マダムと女
房」が上映されています。

昭和七(一九三三)年には東宝映
画が誕生します。第一回作品は
「ほろよひ人生」で、勿論トーキ
ーでした。こうして現在に続く日
活、松竹、東宝の三つの映画会社
が揃い、映画産業は、トーキー化
によってますます発展すること
になります。

昭和十三(一九三八)年の十二月
には、「小田原東宝館」が開館しま
す。大正十二年の関東大震災後、



復興館 (1923年)

「富貴座」「復興館」「娛樂座」の
三館で再開した小田原の映画館
も、昭和二年に「娛樂館」が寄席
になってからというもの、十年あ
まり二館だけで頑張ってきたし
た。映画館新設の話が幾度も立ち
消えが続いたのですが、「東宝館」
の開館によりようやく新しい映
画館が加わったのです。

「東宝館」の昭和十四年の新春
の番組は、豊田正子原作・高峰秀
子主演の「綴方教室」、エノケン主
演「法界坊」の強力な二本立てで、
これで松竹(富貴座)、日活(復興
館)、東宝(東宝館)と、主要邦画
会社が出揃ったのでした。

少し時代を戻しますと、昭和六
年に満州事変が起こり関東軍が
満州全土を占領し、翌年には五・
一五事件が勃発、日本は益々軍事
色に染まっています。

そんな世の中の動きは映画界
にも影響を及ぼします。本来娯楽
であるべき映画が戦意高揚のため
に作られるようになり、観客も



小田原東宝館 (1938年)

また熱狂をもってこれらを迎えるようになります。

砲撃、進軍、日章旗などのスクリーンに観客は割れるような拍手を送る。当時上映された「肉弾三勇士」を上映しない館はまるで不入りだったといわれ、或は「ニュース」だけ観て本編は観ないで出てしまう者も少なくなかった、とさえ言われています。

昭和十三年には「国家総動員法」が発令され、翌十四年には「映画法」が施行されたことで、映画製作も国によって規制されるようになり。そして昭和十六年十二月、日本は真珠湾攻撃によって米英に戦争を布告します。

太平洋戦争中の日本映画は、例えば「ハワイ・マレー沖海戦」が大ヒットしたほか、「加藤隼戦闘

隊「あの旗を撃て！」などの題名が示すように、戦意高揚をうたった殺伐なモノで埋め尽くされてきました。

勝利の勢いは初めだけで次第に日本の戦況は不利となり、やがて日本国じゅうが焦土と化して、昭和二十年八月、無条件降伏し、人々は打ちひしがれます。

小田原は昭和二十年四月以降、たびたび米軍機の空襲をうけるようになり、八月十三日の空襲では死者三十人を超える被害がありました。

映画館では「富貴座」と「復興館」が焼失、「小田原東宝館」だけは辛うじて罹災をまぬかれます。その年の九月には「小田原東宝館」がいち早く再開され、十二月には「復興館」が再開、翌年三月には「富貴座」が再建されます。

関東大震災、太平洋戦争と二度に渡る甚大な被害を受けながら、映画館はその都度復興し、人々に映画を届けてくれたのです。

戦後の映画館の盛衰

戦後の小田原市内での、映画館の状況を銘記しておきます。

昭和二十年九月 小田原東宝館(東宝系)再開

昭和二十年十二月 復興館(日活系)再建

昭和二十一年三月 富貴座(松竹系)

再建

同年九月 オリオン座(洋画系)開館
昭和二十八年八月ロマンス座(新東宝系)開館

昭和三十一年三月 銀映座(大映系)開館

開館

同年四月 中央劇場(洋画系)開館
同年十二月 小田原東映劇場(東映系)開館

昭和三十五年十一月 御幸座(二番館)映画館となる

昭和三十三年の映画は、観客動員数が十一億二千万人余りとピークを迎えます。小田原でも市内の中心部に八つの映画館があり、小田原の人々に映画の楽しみを届けてくれたのです。

個々の映画館にはそれぞれ思い出があります。終戦により外国映画が、それも主にアメリカ映画大量に公開されました。戦争中外国映画に飢えた人々は、争って映画に夢中になりました。名作であるのが駄作であるのが構わず、外国映画に群がったのです。

小・中学生だった筆者も御多分に漏れずその一人でした。当時学校が生徒を引率して早朝の映画館に連れていったものでした。(あるいは進駐(占領)軍の方針だったのかもしれませんが)。

それでも子供たちは嬉々として喜んだものです。当時珍しい「総天然色」(カラー)の映画も驚

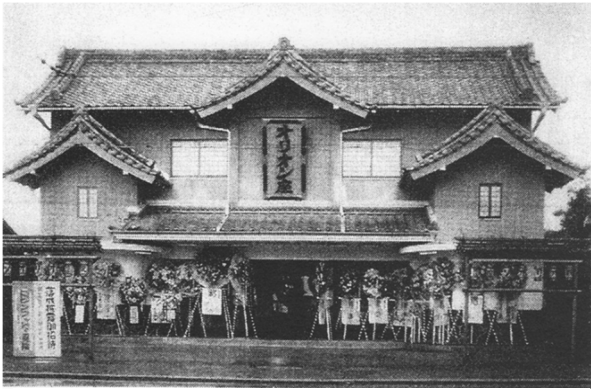
きの眼で食い入るように見入ったものでした。「赤い靴」、「ホフマン物語」などのイギリス映画、「小鹿物語」、「卵と私」などのアメリカ映画、「石の花」などのソ連映画などなど、今でも鮮明に記憶しています。

学校推薦の映画だけでなく、その他に自分でも映画をよく見に行きました。「拳銃の町」(44)、「大平原」(39)、「拳銃無宿」(47)、「拳銃往来」(43)等々の西部劇には手に汗を握り食い入るようにスクリーンに見入っていたものです。

昭和二十一年の「オリオン座」の柿落とし興行が「総天然色」の「ロビン・フッドの冒険」。絢爛たる色彩の洪水と痛快なチャンバラにすっかり外国映画の虜になりました。

昭和三十一年は小田原の映画ファンにとっては益と正月が一緒に来たようなありがたい年になります。「銀映座」「中央劇場」「小田原東映劇場」と、三館もの映画館が一斉に開館し、映画の選択肢が大きく膨らんだのです。

「中央劇場」では洋画専門館として、東京、横浜とほぼ同時に封切映画が観る事ができました。「復興館」改め「小田原国際劇場」では、裕次郎・旭・錠のダイナマイト・トリオが週替わりで派手なアクションを競い合っていました。



開館当時のオリオン座(1946年)

た。「東映劇場」では、錦之助や千代之介の「笛吹童子」や「紅孔雀」のシリーズが人気を呼んでいました。「銀映座」は東宝館の隣に開館し、主に二番館として名画や落ち着いた渋い映画を上映し、いつも満員でした。

さらに現在のお堀端通りには「ロマン座」が開館し、当初は「明治天皇と日露大戦争」など新東宝映画の上映館でしたが、いつしか日活ロマンポルノの上映に替り、入場するのが少々躊躇われるようになってしまいました。



閉館時のオリオン座(2003年)

とで、さしも隆盛を誇っていた映画が娯楽の王者の地位も危うくなり、観客の動員もままならなくなりました。一時九館もあった市内の映画館も、次々と経営不振で閉館に追い込まれます。最も古い伝統を持つ「富貴座」が、昭和三十二年、火事で閉館したまま再建されなかったのを皮切りに、「中央劇場」が平成四年に惜しまれつつ閉館したのについて、平成十二年には「小田原国際劇場」「銀映座」「小田原東映劇場」が相次いで閉館してしまいます。

すっかり寂しくなってしまう小田原の映画館も、「オリオン座」と「東宝劇場」の二館が頑張つて営業を続けてきました。

「オリオン座」では、建物を建て替えて、三つのスクリーンを持つミニ・シネコンのような上映館にしたり、「東宝館」も商業施設の建築に伴って地下の洒落た中劇場に変貌したりしながら古墨を守っていました。ついに平成十四年には両館も閉館することとなり、小田原市内の映画館がすべて消滅してしまいました。

映画館文化があった

昭和四十年代の後期から五十年代にかけては、旧市内に九館もの映画館がありました。今は「シネコン(シネマコンプレックス)」という、一つの建物の中に同一の経営でいくつものスクリーンがあつて一時に何本もの映画を上映するシステムが主流になって、鴨宮の周辺に九のスクリーンを持つ「TOHOシネマズ小田原」と十のスクリーンを持つ「小田原シネマコロナシネマワールド」があります。

それだけのスクリーン数があるので、年間に公開される映画の本数は筆者が小田原市内で観ていた頃と変わらない、もしかしたらそれ以上の本数が公開されているのかも知れません。今の小田

原の人たちは昔より観る事の出来る映画作品の本数選択肢が増えているとも言えるでしょう。

しかし、かつての映画館が持っていたそれぞれの特色も捨てがたいものがありました。オリオン座、中央劇場、国際劇場といえは、観た作品、二本立ての組み合わせ、劇場の入口、さらにはモギリのおばさんや売店の品揃え、座席の座り心地まで思い出すことが出来ます。これは「映画文化」といってもよいのではないのでしょうか。あの頃の映画館は街の文化の一つだったのです。

追記

昨年(平成二十八年)の六月、開成町で「第三回小田原・足柄歴史団体合同展示会」が開かれました。その展示会に、小田原史談会は「小田原とその周辺の劇場・映画館の変遷」を数枚のパネルに纏めて展示し、多くの来場者から「懐かしいネ」「昔はよく通ったものです」などの言葉を頂きました。

今は小田原中心部から無くなつてしまった「懐かしい映画館」を偲んで、再び往時の華やかな映画館ブームが来ることを夢見て一文を草してみました。

小田原桐座について(八) ―川上音二郎乱闘事件の真相―

荒河 純

五、明治以降の桐座

(三) 川上音二郎一座公演

川上音二郎と金泉丑太郎

明治二十四年四月に川上音二郎は小田原桐座で公演の後、茶畑の鶴座で公演中に乱闘事件があり逮捕されたという話は有名である。この辺りの経緯は、大道具師の中川金太郎・初太郎が記した「桐座記録」と昭和十二年に発表された冬木憑「書生芝居」という小説を元にして、石井富之助氏が「明治以降小田原劇場物語(二)」の鶴座の項に詳しく記している(1)。ただこれを読むと事件の大筋は分かるが、発端となった桐座での客の営業妨害の意図や内容までは分からず、漠然と川上らによる世相風刺に対する批判から来ているものと考えていた。

この点を明らかにするために史料を掘り起こしたところ、この一連の公演で川上と行動を共にしていた金泉丑太郎の日記をもとに、演劇評論家、劇作家として著名な伊原青々園(伊原敏郎)が明治四十四年(一九一)発行の『歌舞伎』誌に連載した「金泉

丑太郎日記」を見出した(2)。

金泉丑太郎は大阪新町天満屋という酒屋の息子だが幼少から芝居が好きで、自分で天丸という芸名をつけて素人芝居をやっていた。川上の落語の師匠であった二代目曾呂利新左衛門の紹介で川上と金泉は会い、書生芝居を立ち上げるようになったという。

話を先に進める前に川上音二郎の来歴を簡単に見ておく。

川上は文久四年(一八六四)筑前国博多中対馬小路町の豪商であった川上専蔵の子として生まれた。明治十一年(一八七八)十四歳で家を飛び出し大阪へ密航、見つかると思われし度は東京へ行ったというから、かなり早熟な子だった。

一八八三年頃から「自由童子」と名乗り、大阪を中心に政府攻撃の演説、新聞発行などの運動を行って度々検挙された。明治二十年(一八八七)には「改良演劇」と銘打ち、一座を率いて興行を行ったが、素人の俄芝居のため失敗した。その反省を踏まえて、明治二

十四年(二八九)二月、書生芝居を堺の卯の日座で旗揚げした。この時に一座を組んだメンバーが、川上音二郎、金泉丑太郎の他に、青柳捨三郎、藤沢浅次郎、若宮万次郎など計十五名であった。

桐座の事件

堺での興行は思うように客が入らなかつたが川上は自信満々で、狙いは東京進出にあった。

先ず前回興行経験のあった横浜の蔦座に単身乗り込み交渉成立させ、横浜から百円の金を金泉に送って一座を横浜に呼び寄せた。この横浜蔦座で大当たりを取ってから一躍東京へ乗り込むのが川上の計画だった。

三月一日に蔦座での興行は狂言「経国美談」、大喜利は「オツペケペ」であったが、六日には早くも中止を食らう。八日には演し物を替え、「板垣君遭難実記」を演じたが不入りで十五日には閉場になった。一座は東京へ乗り込むどころか、大阪へ帰る汽車賃も無い状態だった。

そこで、蔦座の手代が小田原に問い合わせしてくれ、寺町の桐座が空いているとのこと、一座は小田原に向かうことになったのである。

小田原桐座では三月二十一日から興行、三十日に打揚げている。途中中断があるので結局五

日間の興行に過ぎなかつたが、この間に面白い出来事があった。以下は「金泉丑太郎日記」を引用する(現代文翻訳は筆者)

二日目か三日目の事でした。東の二階棧敷へ、土地でかなりな身分らしい人が四、五人来ていましたが、その中で洋服を着た若い男が、例の公判の場で、川上さんの相原がしきりに自由党と板垣さんを非難した科白を述べたので、「ノウノウ」と冷やかしました。すると如才ない川上さんの事だから、すぐに見物に向かって、自分も実は自由党であるが、反対党の相原に扮しているから、技芸上やむを得ず、自由党攻撃の科白を言わねばならぬ。しかるにそれを非難せられては芝居が出来ないから、どうか静粛に願いたい、と狂言中で演説をしました。見物は大喝采で暫く静まっていたが、また狂言にかかると、棧敷の洋服が「ノウノウ」と叫び出しました。後にはそれは愚論だ、なんて怒鳴ったから、今度は裁判長に扮していた青柳が演説を始めました。つまり川上の言った通りだから、あなた一人の為に満場諸君に不快の感を与えるは宜しくない、どうか謹聴を願いたい、とやったが洋服の男は酔っぱらっているのを見てやはり讒謗罵詈を止めない。そこで川上君がグツと癩癩を起こしたを、青柳が見たから、いきなり高二重から二階棧敷へ飛



(カッタ・五十嵐祐子)

鶴座での大乱闘

小田原桐座から鶴座に場所を移して興行、この時の仕打(興行主)は關銀次郎であった。ここで入りは良かったが、興行六日目の四月七日に「モンチャク」が起こった。この時の演し物は「蜃気楼将来の日本」であった。この時の様子を、少々長くなるが、同じく「金泉丑太郎日記」の引用で再現してみよう。

狂言は幽霊の有る無いを議論する筋で、川上さんの役は実際幽霊はあるものだと主張するのですが、何時しか二十人ばかりの壮士が二階と土間と東西に分かれて、いずれも棒やステッキを掲げて、幽霊は無いと罵り出したのです。最初は構わずやっていたが、余り騒がしいから幕をしめて青柳に演説をさせました。青柳には暗検察という題で実は警察を当てつけたオハコの演説があります。これをやり出すと、臨監の警官が中止を命じたので、警官に対して弁解しているところへ、土間から一人の壮士が飛び上がって来ました。青柳はその壮士と暫く議論していました。金主が二人仲裁にやってきました。来て無事に納まり、そこで次の幕を明けると、また壮士連が罵詈雑言を始めたのです。青柳は癩癩を起こして、サアベルを下げたまま一番騒がしい棧敷へ高土間から駆け上がって、相手を擲ろうとする、上からもステッキで渡り合って、遂に青柳は

足が滑って下へ落ちました。その内座員が二、三人そこへ飛び上がって、いよいよ喧嘩になろうとしたのを、川上さんが仲裁に顔を出すと、その川上さんを土間へ突き落としました。すると青柳が舞台の道具を留める鏡で相手を擲りました。剣は付かないが、これを見ると壮士は総立ちになって舞台へ飛び上がり、川上さんと取っ組みを始めました。車屋が川上さんを庇ったので、今度はその車屋と壮士とが取っ組み始めます。一方では青柳と藤沢とが相手と掴み合っているところへ、その日は小田原の馬車屋が惣見物をしていたので、これが総立ちになって、我々に加勢してくれました。役者は三階の部屋へ引き上げてしまいます。あとは壮士と馬車屋との取っ組み合いで、舞台の明かりを残らず叩き消してしまふ。巡査が取り鎮めに来たのを仕打ちの關銀次郎が巡査を擲りました。それを向こうの壮士がちらりと見たのです。喧嘩は三十分余り続きましたが、見物はいつの間にか散ってしまふ。嘶部屋に誰やら倒れているものがあるので起こして見ると壮士方の一人でしたが、左の額への字形の創がありました。無論他の壮士は姿を見せないのので警官はその負傷者を連れて引き上げました。ところがかの仕打が巡査を擲ったのと、青柳が官吏侮辱の演説をしたのとで、急に警察へ兩人を拘引してしまいました。

以上が悶着のあった当日の実況である。この後、かの負傷した壮士が川上にサーベルで斬られたと申し立てたため、川上も拘留されることになったのである。

そもそも、地元の壮士が二十人も棒やステッキ持参で芝居小屋に乗り込むこと自体、悶着を起こすのが目的であったとしか考えられない。この辺りの事件の真相について、伊原は「金泉丑太郎日記」の中で次のように評している。

何故小田原の壮士が川上の芝居へ妨害を試みたかというに、それは桐座で川上の為に恥辱を与えられた洋服の男が復讐を試みたのであった。この男は近在の豪家の息子で、その村で学校の教員を務めていたが、桐座で恥をかかれたその日に、生徒の父兄たちも見物に來合わせて、なるほど役者の方がかもつともで、先生の方が乱暴である。そういう人に子供を任せて置けないと学校を引かせてしまふ。他の父兄たちもそれを聞いて、ぼつぼつ子供を退学させた。重ね重ねの不面目に、村にもいたたまれず学校を辞職して、東京へ保養に行くと村を発ったが、その行きがけに三十円の金を小田原の壮士に蒔いて川上一座に対する仕返しを頼んだそう。

桐座の事件があつてから鶴座の大乱闘まで二週間程度である

び上がって、その男を引きずり下ろそうとしました。そのうち、青柳の車夫が駆けてきて二人でその男を楽屋へ連れて行くと、大勢がボカボカ擲りつける。また舞台にいた川上が、ここへ連れて来いという。洋服の男は真っ青になって、どうか許してくれと川上に詫びたが、私に謝る事はない、観客諸君に謝りなさいという。どうか堪忍してくれというのを、弁護士に扮した 藤沢君が、見物にお辞儀しろと首を引つ捕らえて見物の前へ無理に屈めさせ、それで宜しいと突き放してしまふと、その男は口惜しそに元の棧敷へ帰ったが、次の幕があくと芝居を出てしまいました。

が、村ではこれだけ大きな波紋を起こしていたのである。子供を即退学させるといふ父兄の決断の早さにも驚かされる。

この首謀者の教師の名は分からないが、彼に頼まれて鶴座に乗り込んだ壮士の名は記録されており、神保佐一郎、松本貞治、三輪啓助、星崎広助、杉山定治等である。神保佐一郎は後に東海新報社長、星崎広助は豆相新聞社長になった人である(1)。いずれも当時は血気盛んな若者であったとはいえ、それだけの人物を動員出来た件の教師も、地元では名が知られていたと思われる。

おそらく「桐座記録」を記した中川金太郎もこの辺りの事情はよく知っていただろう。しかし、小田原の地元にとってはこの真相は不名誉な事であり、殊に芝居を愛する者にとっては極めて口惜しい事だったに違いない。そこで、曖昧なあたりでしか記録しなかったのではなからうか。

裁判をめぐる

この乱闘事件の裁判が四、五日後から小田原地方裁判所で行われた。被告は川上音二郎、青柳捨三郎、關銀次郎。弁護士は萬年町の中田寿一郎(後に町長、小田原図書館長)であった。事件は大量的に新聞で報道されていたため、

世間の注目を集め、この裁判見たさに多くの人が押し寄せた。この様子を大正時代の作家である村松梢風(村松友視の祖父)は次のように描写している(3)。

たびたびあった公判に傍聴人は其の都度数が増していったが、いよいよ判決の下る四月二十日当日になると、小田原から五里も六里も先の在所から提灯を灯して、前の晩の二、三時頃から出掛けて来る。裁判所の門前には菓子屋や鮎屋が出るという景気で、しまいは傍聴券がセリ上がって一枚一円という相場になった。同時に川上が無罪か有罪かという賭勝負をする者が沢山あるという人気。傍聴席は満員であった。裁判長は三名の被告に対し次のように申渡した。川上音二郎、關銀次郎は無罪。青柳捨三郎、毆打は証拠不十分、官吏侮辱の廉にて禁固二十三日、罰金三円七十五銭。川上に無罪が言渡された時には、傍聴席でどっと喝采が起こった。

裁判所の前に店が出たというような話は聞いたことがない。この裁判がどれだけ注目を集めたか推して知るべしである。

川上一座は裁判のために十日以上も芝居を休んでいるため、座員はそれぞれの持ち物を質に入れて何とか食いつないでいた。世間はこんな川上と座員に同情した。

川上が無罪になって興行再開かという時になって、検事は川上を控訴するという。これに抗議する人たちは、「検事の家を焼き払ってやる」と裁判所の前に貼り紙を行った。事実、その夜検事宅の隣に付け火があつたという。それから後も各所でぼや騒ぎが続いたようである。結局、控訴裁判は横浜で行われ、そこでも川上は無罪の判決を勝ち取ったのである。

小田原で裁判が行われている間、川上一派は東京の中村座との折衝を進めていた。判決が出た数日後には中村座から人が来て交渉に及んでいる。その結果、六月二十日、川上音二郎は二十八歳の座長として、念願の中村座の舞台に立つことになった。度々の中止命令、喧嘩、逮捕、裁判と世間を騒がせ新聞沙汰になる度に注目を集め、それが宣伝効果になって観客を集めるといふ川上のスタイルは、計算された部分もハプニングで起こったことも含めて貪欲に利用していった感がある。

文芸評論家の松永伍一は『川上音二郎』の中で、次のように指摘している(4)。

まさに旧派に対する新派のスタートは、即席料理の熱いものを食わされてのと同じで、その瞬間は興奮するが、味わって観るゆとりもな

く、永い時間のうちに練り上げられてきた人間性の描写に欠けるので、つい喉元を過ぎると残るものはサラついた感覚である、といった具合の粗暴きわまりない欠点だらけであった。しかし、音二郎は活劇でなくして面白くないと信じており、そこに新しさが潜んでいてその起爆力によって演劇改良の実が挙げられると思ひ込んで疑わなかった。野暮と嘲笑されようと大衆は喝采してくれるのではないか。

あえて粋な歌舞伎の世界に野暮を仕掛ける川上の企みが、小田原桐座での事件を契機にして廻り始めたのである。結果的にはあるが、ここでも江戸時代の頃と同じように、小田原桐座が出世舞台として機能したことは歴史の皮肉というべきかもしれない。(つづく)

参考文献

- (1) 石井富之助「明治以降小田原劇場物語」(二)、『小田原史談会々報』第一三六号、一九八九年
- (2) 伊原青々園「金泉丑太郎日記」(一)～(三)『歌舞伎』第二三五、一三六、一三八号、早稲田大学、一九一一年
- (3) 村松梢風『川上音二郎』上巻、太平洋出版、一九五二年
- (4) 松永伍一『川上音二郎』近代劇・破天荒な夜明け、朝日選書三四八、一九八八年

沖縄の二宮金次郎像調査日誌

あしがら平野一円塾 露木 順一

はじめに

八月三十日から九月三日まで、沖縄の小・中学校などに残る二宮金次郎像について調査してきた。郷土の偉人、二宮尊徳を学び農業を中心にもちづくり貢献しようとして作った「あしがら平野一円塾」のメンバー四人、小澤峯雄、柏木茂高、小林秀樹、露木順一で訪問した。

メンバーの一人である小澤さんの奥様が沖縄県のご出身で、沖縄にもお宅を持っていられるの



図1 今回の沖縄訪問図

で、そこを拠点にさせていたのだ。沖縄県北部の国頭郡今帰仁(なきじん)村である。離島の伊是名(いぜん)島も含めて六ヶ所の金次郎像を見て回った。

私たちがなぜ沖縄の金次郎像の調査を思い立ったのか、それには三つ理由がある。一つは純粹に沖縄県でも金次郎像があったのかという驚きである。少年金次郎像は戦前、国威発揚に用いられたが、先の大戦で唯一の地上戦が行われ過酷な体験を持つ沖縄県民がどのような思いで金次郎像を

見ているのか知りたかった。二つ目は、現在沖縄では二宮金次郎について実際にどのように教育に活用しているのか、そこに本土との違いがあるのかないかを直接校長から話しを伺いたかった。三つ目は、今後の交流への期待である。二宮金次郎は成人して尊徳と

なり栃木、茨城、福島などで農村再興に生涯を賭けた。尊徳の弟子たちも全国各地でその教えに基づいてまちを興したことは良く知られている。二宮尊徳の実像や考え方を正しく伝えることを通じて交流を始めたいと思ったのである。

もう一つ付け加えるとすると、まちづくりに関わる関心である。二宮尊徳の農村再興の考え方がある報徳仕法を受け入れる素地が沖縄にあったのかどうか知りたかった。現代の沖縄では、国より膨大な振興予算が注入されており、長期計画の策定や財政規律を求める報徳仕法は有効ではないかと睨んだからである。

昭和になって全国的に金次郎像建立の動きが広がり、この動きは沖縄県にも波及し金次郎像が建てられたと思われる。しかし金属製のものは国家に供出されて戦争の資材となり、多くの金次郎像は戦後になって改めて建てられたもので、沖縄では木造であったりコンクリート製であったり陶器製のものもあった。また、寄贈者が判らないものもあった。

二宮尊徳の生まれ故郷の我々の地域とは全く地域事情は異なり、金次郎像に対する関心は決して高くなかったが、我々の訪問が刺激を与え、小・中学校の校長先生たちが二宮尊徳の持つ教育的

な意義を考えるささやかなきっかけとなったと思う。この種から今後の交流が生まれることを期待する。

まちづくりに関して言えば報徳思想のような考え方が沖縄に存在したかは不明であったが、どんな困難にも立ち向かって頑張りぬくという「シチマンタル精神」が残っていることを知った。これを土台にして、現代の沖縄のまちづくりには報徳思想の応用の余地は大いにいると感じたのである。

八月三十日(火)曇

台風十号の行方が気がかりであったが、当初のコースより東寄りに進路を変えたために羽田空港周辺の天気は荒れることなく無事出発した。

那覇空港からほど近いホテルに荷物をおろし、午後五時過ぎに事前調査をして下さった大城淳男さんら小澤峯雄さんのご親戚の皆さん方との打ち合わせ兼懇親会の会場に向かった。

なぜ沖縄の二宮金次郎像を調べに来たかを話した。沖縄の過酷な戦争の歴史を踏まえると本土と同じ感覚で二宮金次郎を捉えられないのではないかとこの感想を伝えた。苦難を耐え忍んで偉人となった二宮金次郎は国家の統治方針に沿う理想の国民像とし

て国民運動の道具となった側面は否定できないからである。大城さんは、意外感を示されるとともに私たちの感想を歓迎する表情を見せられた。

八月三十一日(水)曇のち晴

沖繩の二宮金次郎像の調査初日は、最初に那覇市内の市街地にある天妃(てんぴ)小学校を訪れた。「天妃」という女神の名の付く小学校の校長先生は、運天克子さんという女性の方で、天から女神が舞い降りたか、あるいは童宮城の乙姫様が地上に現れたかのようなゆつたりとしたふくよかな印象を与える校長先生だった。

運天先生から二宮金次郎像の説明を受けた。像は、校舎の玄関の正面にあり、高さ七十五センチの木造。昭和五十年(一九七五)という年は書かれているが寄贈に至る経緯は不明であり、どこで製造されたのかも判らない。仏さまのような柔らかな表情が特徴的であった。台湾で製造されたものと



図2 那覇市天妃小学校
木造金次郎像

店経営の安木屋を訪れた。安仁屋博一会長は、書店と文房具店を創業するにあたり書を読む金次郎の姿は会社の象徴に相応し

似通っているのではないかとの指摘もあったが、この木造の金次郎が手にしている書物には、「大事をなさんと欲せば小なることを怠らず(以下略)」という「積小為大(せきしょううだい)」の報徳の教えが書かれていた。

運天校長先生との話は弾んだ。いたずらをした小学生に罰として金次郎像を磨くという習慣があったと聞いた。そのせいか金次郎像はとてもきれいな姿だった。平和教育についても意見を交わした。沖繩の過酷な戦争の歴史を知ってもらうためには沖繩の子どもたちが学んだことを他の地域の子どもたちに直接語るのが一番であろう。二宮金次郎の生まれた小田原地域の小学校と金次郎像の縁で交流が出来ればそれが可能になるだろう。運天先生は非常に前向きで、実現できる気がした。

続いて那覇市の代表的な商店街、国際通りの中にある昭和二十九年(一九五四)創業の文具・書

いと考えたというこ
とであ
った。
創業者
は刻苦
勉勵の
人で、

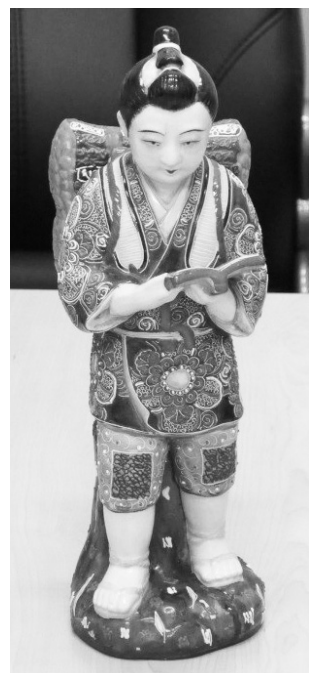


図3 那覇市安木屋文具店
陶器製金次郎像

十年かけて通信教育で慶応大学を卒業されたということで、仕事をしながら学ぶ少年金次郎の姿と重なり合った。このようなキャラクターもあって創業者が数々の金次郎像を収集されたという。残念ながら制作年月日や作者は判らないが、博物館に展示するような黒光りする金次郎像もあった。陶器の金次郎像は珍しく色彩も鮮やかであった。

さらに那覇から南に下り島尻郡八重瀬町の東風平(こちんだ)中学校を訪問した。校門の近くにコングリート製の金次郎像が建っていた。これはとてもユニークで、ガジュマルの大きな木の下で本土では見たことの無い縦縞の金次郎が書物を読んでいる。ご近所の方が手作りで制作されたものが放置されていたのを第十五代校長の金城佳孝さんが引き取ったということである。これに関して金城先生は、「沖繩県内では金次郎像のある中学校は、ほとんどなく、二宮金次郎が提唱実践した

業績について今一度考えてみたい」という思いだったと記している。一九七〇年一月二十五日の制作と刻まれていた。

沖繩県内で最も有名なスポーツ強豪校だということで、並べきれないほどのトロフィー、優勝旗がひしめいている。現校長の大城盛幸先生は「学校が荒れた時もありましたが今は克服し元気がみなぎっています」と話された。二宮金次郎については年に一度あいさつで触れる程度とのことだが、生徒たちの活き活きとしたあいさつを聞いてみると明るい金次郎精神が根付いているのではな

いかと思われた。
次に沖繩本島を北に戻り名護市に向かった。真喜屋小学校の跡地に高さ七十一センチの金次郎像があった。一九九五年創立百周年の際に建てられたと記録がある。近くの公民館の女性職員から傷ましい歴史をうかがった。沖繩での地上戦の始まる二か月前の一九四五年四月、敵軍に活用され

るのを防ぐため自ら学校を焼いたということである。記録には火災となつていたので真実の歴史を記載するのをためらつたのだと推察される。真喜屋小学校は戦後海岸近くに再建されたが再び悲劇が襲う。今度は津波にやられたのである。一九六〇年五月のチリ地震による津波である。現在は高台に新しい小学校が建っているが、その校庭に「シチマンタル」の精神を訴える看板があつた。

「昔、わが羽地(註)は『ヤキパニジャ』と言われた。我々の祖先は雨の日も風の日も灼熱の夏の日も凍てつく冬の日も照る日曇る日働き通した。だから『ヤキパニジャ』は働きの謂いである。そのおかげで今のような住みよい素晴らしい羽地となつた。その働きの支えてきたのが『シチマンタル』すなわちあくまでもやりぬく根性である。いかなる困難待ち受けて居てもシチマンタルの掛声―超えていちゆさ。」と書かれていた。「シチマンタル」とはあくまでもやりぬく根性ということである。二宮尊徳が唱えて農村復興の基本とした「至誠」「勤労」との共通性を強く感じた。沖繩と報徳の精神がつながつたように思えてならなかつた。

(註)羽地村(はねじそん)はかつて沖繩県国頭郡にあつた村で、現在の名護市北西部にあたる。現在は羽地

地域として名護市の一地域として位置づけられている。

九月一日(木)曇のち晴

朝から今帰仁村(なきじんそん)の運動公園を見て回つた。驚くばかりの充実した施設である。展望台から周囲を見渡すと、静かな水面に島がくつきりと浮かんでいて、沖繩に来ていると実感があつた。

運天港から伊是名(いぜな)島に向かつた。フェリーにて一時間弱で到着、港のほど近くにある伊是名小学校を目指した。生徒数は七十八人で、美しい小さな離島の村の小さな小学校といつたところである。

校舎の前にある金次郎像はコンクリート製で、正面に埋め込んでいる。「報徳」の文字盤には感動を覚えた。昭和十四年八月、寄贈者四十六人となつていた。戦前にあつた金属製の二宮金次郎像は金属不足を補うために供出をさせられたが、伊是名小学校の二宮金次郎像はコンクリート製だったので生きながらえたとと言える。座間味校長先生に、金次郎が大人になつて農村の復興に尽くした本当の姿を知ってもらい教育に役立ててもらふことはもちろん、我々の地域との交流につなげたいと話した。

伊是名島から今帰仁村の運天

港に戻り古宇利島に再び渡り遅い昼食を取つた後、隣町の本部町にある世界的に有名な美ら海水族館を目指した。

九月二日(金)晴

今帰仁村役場で喜屋武(きやん)治樹村長と面談した。

町長室に今帰仁城址のさくら祭りのポスターが貼られていて、琉球王朝時代のお城の遺跡の中のさくら祭りは五百年前に舞い戻つたようで、ロマンチックな宴だと想像できる。城の復元は容易ではないがかつての城の想像図を描くことが出来れば三次元のコンピューターグラフィクスでバーチャルに再現できる。あるいは、さくら祭りの夜にプロジェクションマッピングという映像化技術を活用して空間に映し出すことが出来れば話題を呼ぶのではないかという提案をした。

二宮尊徳が当時の先進的な農業技術を活用し水田の生産力を向上させたように、常に先端の技術に目を配り活用して行くことは現代の報徳仕法と言える。

また、沖繩には、十七世紀末から十八世紀中葉まで活躍した琉球王朝時代の政治家、蔡温(さいおん)がいる。河川工事や山林の保護に尽力し、琉球農業の発展にも

貢献した。王国の官僚と市井の農業思想家という違いはあるが、蔡温と尊徳には共通性もある。こうした歴史的な人物の比較対象を通じて議論すれば、沖繩と本土の首長同士の意見交換もし易くなるだろう。沖繩と二宮尊徳との関わり糸口を見出して行くことにつながるのではなからうか。

今帰仁村で創立百二十八周年の天底(あめそこ)小学校を訪問した。二宮金次郎像は存在しないが、かつて存在した記録が残つていた。玉城武利校長先生が創立五十年の際にまとめた記録を探し出してコピーしてくれた。そこには、二宮金次郎像について驚くべき記載があつた。「二宮尊徳先生銅像」という写真が掲載されている。薪を背負つて本を読んでいる二宮金次郎で、像が七十五センチメートルほどだと仮定するとその倍もある立派な台座が写っている。金次郎像の当時の様子が五頁に渡つて詳細に記述されているのである。昭和十三年(一九三八)十月二十二日、日本晴れの日に



図4 伊是名小学校の金次郎像

われた式典では、二宮尊徳の教えをまとめた報徳訓が奉読された。「子孫の相続は夫婦の丹精に在り、父母の富貴は祖先の謹功に在り、吾身の富貴は父母の積善に在り、子孫の富貴は自己に勤勞に在り、身命の長養は衣食住の三つに在り(以下略)」という内容である。寄贈者の挨拶には、「母校将来児童訓育の上から且つは学区民一般民の教化上より記念事業の一つとして二宮先生の銅像を建設したいと思うが寄贈してくれまいかというご相談が親しくございました。」と書かれている。児童の教育と人々の教化という目的があったことが判る。校長のあいさつは「最近我が国が東洋平和の建設並びに政界指導者の立場を持つて任じるようになってからは日本精神に立ち返れ、神ながらの道に立ち帰れと盛んに唱道されるようになりましてその精神その生活態度を二宮先生に求めるようになりました」となっており二宮尊徳が当時の日本の統治にとつて理想の人物とされている事情がはつきり読み取れる。さらに、二宮尊徳に対する尊敬の念を述べた後、「目下国家多事多難の際、我等は二宮先生の御教訓を中心にまた寄贈者の御精神を我が心に啓培して日々国のみたからからなる児童の薫陶育成の任に努力いたし尚ほ二宮先生の分

度の御方針を我が郷に植え、寄贈者の御まごころを郷土民の心に育てて児童の向上家の興隆、村の発展国家の隆盛に日々奮闘努力いたし以つて今日の御芳志に酬ひ度い所存であります」と決意を述べている。式典の最後は、二宮金次郎の歌の斉唱となつていいる。驚いたのは出席者の人数である。式場には六百人でその他二千人ほどの方々は運動場で参列とあり、前年に日中戦争が始まり国威発揚が盛んに唱えられた時期であり、国の政策誘導によるものかそれとも二宮尊徳に対する尊敬の念が本當にどの程度根付いていたのか解明することが必要だと思つた。

天底小学校にはガジュマルの大木があり、沖繩らしい校庭の雰囲気を感じ取つた。天底小学校の調査で今回の二宮金次郎に関する調査は全て終了した。

九月三日(土) 晴

小澤さんのお宅を片づけて一路那覇空港に向かった。空港に着き出発の手続きをしていると、案内役としてすっかりお世話になつた大城淳男さんがご夫妻でお見送りに来て下さつた。手作りのサーターアンダーギーを届けて下さつた。沖繩特産の揚げ菓子でとても真心がこもつていてほかほかだった。

おわりに

今回の沖繩での二宮金次郎像の調査は事前準備が万全で調査は極めて円滑に進んだ。しかし、勘違いしてはならないのは、沖繩で二宮金次郎像がすんなり受け入れられている訳ではないという事実である。金次郎像を撤去した小学校もあり、なぜ撤去されたのか理由を直接伺いたいと思つたが、それはかなわなかつた。戦前、国家が二宮金次郎の生涯を、困難に耐え頑張るイメージを誇張して国民に植え付けようとした歴史に対し拒否感があるのだろう。こうした二宮金次郎、二宮尊徳に対するイメージは実像とかけ離れている。道徳的に優れた側面はごく一面に過ぎない。農民の自立を促し農村復興に尽くした実践家であつたからこそ二宮金次郎像に反感を持つ方と直接会つて、本當の二宮金次郎、二宮尊徳の実像を伝え誤解を解きたいと思つた。しかし、その機会を持つてなかつたのは残念である。

調査が終了した二日の晩に四人で居酒屋に出かけ杯を傾け慰労会を開催した。その帰りがけにスナックに立ち寄ると、八十歳ぐらいのお年寄りが一人で飲んでおられた。この方の話をうかがつて驚いた。一九四四年八月、本土に疎開しようとしていた児童が多数乗船した貨物船対馬丸がア

メリカ軍の潜水艦の魚雷攻撃を受けて沈没した事件が発生した。七七九人の学童を含む一四七六人の犠牲者が出たという傷ましい事件である。スナックで同席したそのお年寄りは、自分たまたま間に合わずに乗船しなかつただけで乗つていれば死んでいたという話をされた。沖繩には戦争の記憶はまだまだ生々しいものがあるのだ。そのお年寄りが一曲歌を披露してくれた。「沖繩(うちな)という民謡であつた。しみじみとした謡いぶりで四人も仲間に加わり一緒に歌つた。沖繩の人うちなーんちゅと、本土の人やまとんちゅーが心を通わせた一瞬だった。

(付記)

「あしがら平野一円塾」
二宮尊徳の教えを学び、農業振興などまちづくりに貢献する住民グループ。代表・露木順一(前開成町長 現日本大学教授)

新会員紹介

名前(敬称略)	住所
柳川 明夫	小田原市扇町
野村 朋弘	小田原市小竹

平成輔と小田原

野村 朋弘

はじめに

小田原の歴史遺産といえは何か、と問えば筆頭にあげられるのが戦国大名後北条氏に關連することだろう。小田原城をはじめ多くの歴史遺産に溢れている。特に昨年はNHK大河ドラマの「真田丸」でも後北条氏は登場し個性を放っていた。また、平成二十二年(二〇一〇)から発掘されていた小田原城の御用米曲輪で発見された庭状遺構(石の庭園といつてもよいだろう)の発掘報告書もまとめられ、更に後北条氏の研究は進展することだろう。



平成輔の墓所

翻って、それ以前の小田原はどのような姿だったのだろうか。後北条氏が小田原に入る前の大森氏や、更には鎌倉御家人の土肥氏や小早川氏といった武士がおり、早川庄や成田庄といった庄園も多くあった。戦国時代に限らず古代から中世前期にかけての歴史の積み重ねも存在する。武士については湯山学の『相模武士全系譜とその史蹟』が詳細にまとめており(1)、庄園の成立過程などは『小田原市史』の通史編 原始古代中世がとてども丁寧(2)にまとめている。そうした中で、本稿では小田

原にある一つの墓に注目したい。早川の河口にほど近い場所が存在する「平成輔の墓所」である。南町三丁目にあるこの墓は

小田原市の史跡に指定されている。平成輔といわれて、すぐにピンとくる方は、南北朝時代に詳しいといわれてよいだろう。成輔は後醍醐天皇の側近として知られ、討幕運動の際に幕府に捕縛される。鎌倉に護送される途中の相模国早川尻にて斬首された(3)。その地(江戸時代までの地名は山角町)にあった潮音寺に葬られたとされ、江戸時代には石祠が建てられて今日まで大切に遺されている。潮音寺は明治四十年(一九〇八)に廃寺となり報身寺に合併されたという。現在では海というよりも西湘バイパスの道路が見える当地にひっそりと遺されている。今回は小田原を終焉の地とした平成輔について取り上げてみたい。

平成輔に関わる先行研究と鎌倉後期の朝廷の様相

平成輔は後醍醐天皇の忠臣であり、討幕運動を支えた人物として『太平記』などでも描かれている。但し成輔に関する専論は皆無に等しい。唯一といってもよいものが小田原の郷土史家中野敬次郎が記した『建武中興の忠臣平成輔卿の事蹟と其の遺蹟』である(4)。昭和十四年(一九三九)に刊行された本書は、戦前の南朝研究の成果の一つといつて

もよい。

戦後となつてからは南朝に限らず中世の天皇制や朝廷の研究が一時的に停滞していた時期がある。しかし、一九八〇年代以降になると鎌倉後期から南北朝時代にかけての研究が森茂暁をはじめ本郷和人や市沢哲らによって進められ、多くの点が明らかになっていく(5)。中でも本郷和人は、鎌倉後期の訴訟制について朝廷から発給された文書を分析し、歴代天皇の政務にたずさわる廷臣を抽出している。後醍醐天皇の鎌倉時代における伝奏(奏請を取り次ぐ役職)は、北畠親房・吉田定房・万里小路宣房・三条公明・阿野実治・平成輔である。平成輔は後醍醐天皇の忠臣として実務を担っていた(6)。

また筆者は学生の頃に「鎌倉後期の持明院統と廷臣」なる小論を発表し、鎌倉後期の朝廷の様相について論じている(7)。通説的な理解では、鎌倉時代の後期とは天皇家の王統が分裂し、それぞれの王統に廷臣が従い、迭る王位についた「兩統迭立」期とされている(8)。王位継承について決定権を握るのは鎌倉幕府であり、それに不満を持つ後醍醐天皇や廷臣たちが倒幕運動を行い、元弘三年・正慶二年(一三三三)に幕府は滅亡した。こう書いていくと、さも朝廷は王統

の分裂とともに廷臣も二分され、討幕運動も盛んであったように思われることだろう。しかし実際に史料を分析していくと、多くの廷臣が「日和見」であり、後深草天皇を祖とする持明院統と、龜山天皇を祖とする大覚寺統に積極的につき従う者はごく一部だったことが明らかにされてきている。こうした中で、果たして平成輔の実像は如何なるものであったのか。改めて成輔の事績を振り返ってみよう。

平成輔の事績

平成輔は正応四年(一二九一)に平惟輔の子として生まれる。成輔の家は代々天皇の秘書官である蔵人を勤め、権中納言まで上る「名家」であった。鎌倉後期の朝廷は、家格によってほぼ極官が定まっていた。家格としては撰関家・清華家・羽林家・名家などがある。名家は実務を担う家柄として蔵人の他、弁官などを勤め納言にのぼる。父の惟輔は五位蔵人を勤め権中納言まで上り、祖父の信輔は五位蔵人から右大弁などを歴任し参議となつてゐる。

成輔は二十六歳の文保元年(一二二七)三月四日に蔵人に補任され左衛門権佐を兼ねる。翌年には兵部権少輔を兼ね、更に翌年の文保三年(一二三九)には

右少弁となり、元亨四年(一二三二)までに左中弁までのぼる。同年と嘉暦二年(一二三二)には蔵人頭を勤め、参議に任ぜられ公卿に列した。官職だけをみてみると、名家層の者として順調に昇進しているようにも見える。では実際にはどうか。

鎌倉後期の朝廷の様相を知る格好の史料が『花園天皇宸記』である(9)。花園天皇は後醍醐天皇の前代の天皇である。花園天皇は持明院統、後醍醐天皇は大覚寺統と王統が異なるものの、王統に拘わらず朝廷内のこと、更には朝幕関係まで幅広く日記に遺しており、大変貴重である。また成輔が蔵人に任官した文保元年とは花園天皇が在位していた期間にあたる。成輔は花園天皇に仕えて官人としてのスタートを切った。『花園天皇宸記』を捲っていくと、成輔は蔵人として出仕するようになってから一九回、断続的に登場している。初見は文保元年三月二十八日条である。まずはその史料をみてみよう。

【史料一】『花園天皇宸記』文保元年三月二十八日条(裏書)
南殿拜座、坤向敷之、仍引直着座(須仰蔵人直之、而依便宜聊引直、已欲着座時見付之故也)、屏風立様不似先々、公躬朝臣仰

蔵人令直之、成輔奉行也、父卿随分嗜記録、而成輔頗疎略歟、當時每人如此、職事皆不知公事、

この日は八社奉幣(伊勢神宮をはじめとする重要な神社に幣帛を捧げる神事)が行われており、奉行を勤めていたのが成輔である。彼は行事の準備を失敗し「父の惟輔は記録を嗜み故実を知っているが本人は疎略である。いまの蔵人たちというのは皆このように公事を知らない」と花園天皇に痛烈に批判されている。なんとほろ苦い初出である。しかし、その後は新造内裏の遷幸に従うなど、蔵人としての仕事をつつがなく勤めていることが散見される。

翌年の二月には花園天皇から後醍醐天皇へ讓位があり、成輔は引き続き蔵人を勤めることとなった。ここで初めて後醍醐天皇と成輔との直接の接点が生まれたと考えられよう。この時点から後醍醐天皇のみの忠臣であったかという点、『花園天皇宸記』を見る限り、そうとはいえない。後醍醐天皇の親政下で左中弁を勤めていた元亨三年(一二三三)十月十七日には、持明院統の嫡流である後伏見天皇の皇子、量仁親王(後の光厳天皇)の元服の奉行を勤めることとなった経緯が記されている。

【史料二】『花園天皇宸記』元亨三年十月十七日条
親王元服奉行人、被仰行高之処、申子細、他人無其仁之由被仰下之間、維輔卿有勅免、奉行事可被仰成輔歟之由執申了、(維輔卿、去年未久事、其沙汰之趣、参差之由、於関東訴申之条、不可然之間、有勅勅也、然而已及兩年、前関白命之上、強非自身之重科、仍如此所申行也)、

ここに記されている「維輔」とは、成輔の父である惟輔のことを指すと考えられる(10)。この頃、未久領と呼ばれる所領についての相論が大覚寺統と花園院との間で起きていた。惟輔は大覚寺統の実務担当者として花園院と交渉していたようである。交渉の際に花園院から勅免を蒙っていた。その勅免を得るために成輔が奉行に推薦されたのだ(11)。数日後には成輔が奉行を勤めることが決定される。この他、持明院統の仏事にも加わっている記事もあり、成輔は後醍醐天皇に仕えつつも、持明院統の後伏見院や花園院にも参仕していたことがうかがえる。

【太平記】第一卷の「関東調伏」のために、事を中宮の御産に寄せて、かやうに秘法を修せられけるとなり(12)にあるように、後醍醐天皇の倒幕の動きは元亨

二年の春の段階でスタートしていた。そうした中で、父惟輔が受けた上皇からの勅勘を免じてもらうため元服の奉行をすることも、単に後醍醐天皇の近臣というだけではない側面があったことを十分に想起させるだろう。翌年、成輔は突如として蔵人頭と中宮亮を辞している。

【史料三】『花園天皇宸記』元亨

四年十月三十日条

(前略) 蔵人頭中宮亮成輔辞兩職籠居、称所勞之由云々、但非実事歟、諸人不審云々、(後略)

おりしも、万里小路宣房が関東へ下向し後醍醐天皇の倒幕の動きに対して釈明を行い帰洛していた時期である。花園院からも単なる所勞ではないのでは、と不審を抱かれています。取れよう。正中の変と呼ばれる後醍醐天皇の一度目の倒幕の動きはこうして防がれた後、成輔は嘉暦二年、蔵人頭に再任され翌年には参議に昇進している。

『太平記』では後醍醐天皇の倒幕運動に従う廷臣として、日野中納言資朝、蔵人右少弁俊基、四条中納言隆資、尹大納言師賢、平宰相(参議)成輔があげられている(13)。とはいえ、参議になっても成輔は量仁親王の加冠の礼にも参加し持明院統にも尽く

している(14)。

また、そもその話をすると成輔は後醍醐天皇の親政下で弁官や蔵人を勤め、参議に昇進している。しかし彼が発給した文書を確認すると伝奏として後醍醐天皇の論旨を発給したのはたつたの一通に過ぎない。改めて本郷和人の知見に学びつつ、後醍醐天皇の親政をみていこう。

後醍醐天皇は大覚寺統の中でも傍流として従う廷臣も極めて少なかった。論旨の奉者となる数少ない特定の廷臣たちと密接に関わり倒幕のメンバーを形成していく。論旨を発給していた主要な人物は万里小路藤房、同季房、北畠具行、阿野実治、中御門宗兼らである。彼等は蔵人や弁官を勤め、文書の実務を担っていた者だ。翻って成輔は論旨の発給にもあまり関わらず、一方で持明院統とも近い。

成輔の本来の姿とは後醍醐天皇のみに従う忠臣ではなく、他の公卿たちと同様、後醍醐天皇や持明院統にも「あなたこなたしける」人物だったのではない。いまのところ判断材料が乏しいので推定に過ぎない。しかし今後の検討課題としてもよいだろう。

おわりに

後醍醐天皇は元弘元年(二三

三)八月二十四日に挙兵のため南都へ行幸した。南都行幸に従っていなかった成輔は翌日六波羅探題の武士たちに捕らえられてしまう。成輔はその後、六波羅から鎌倉へと移されることになる。太平記では成輔の最後を次のように記している。

【史料四】『太平記』第四卷

「宮々流し奉る事」

平相成輔をば、河越三河入道円重具足し奉り、これも鎌倉へと聞こえしが、下しも着け奉らで、相模国早川尻にて失ひ奉りけり

元弘二年(二三三三)五月二十二日、成輔は小田原の地で四十二歳の生涯を終えた。翌年、後醍醐天皇の討幕運動は成し遂げられ、建武の新政がスタートする。日野俊基や資朝らと同様に成輔も倒幕の途中で倒れた忠臣として、戦前の南朝研究の中で讃えられていく。しかし事績を史料に拠って振り返ってみると、単なる後醍醐天皇の忠臣ではない姿が見えてくる。

朝廷において一代の天皇のみに仕えることは非常に稀であり、廷臣の本来の姿は天皇が代替わりしても、王統が変わるうとも支え公事を行うことだった。その点から鑑みるに成輔は朝廷の

臣ということに忠実だったのかも知れない。

本稿では小田原に眠る一人の廷臣にスポットを当てて考察を行った。かように小田原には多様な歴史遺産がある。小田原に住する者の一人として、今後も知見を広めていきたいと思う。

註

(1) 湯山学『相模武士 全系譜とその史蹟』三 中村党・波多野党、戎光祥出版、二〇一一年。初出は「かながわ風土記」に連載された「相模武士の群像」である。

(2) 『小田原市史』の通史編 原始古代中世、小田原市刊、一九九七年。

(3) 『太平記』第四卷 三「宮々流し奉る事」兵藤裕己校注の岩波文庫本を用いた。底本は西源院本。以降、『太平記』を用いる際には同書を用いた。

(4) 中野敬次郎『建武中興の忠臣平成輔卿の事蹟と其の遺蹟』小田原振興会、一九三九年。なお『小田原史談』では、三〇号、二二二号、二四三号にて平成輔の墓所が取り上げられている。

(5) 代表的なものとして、森茂暁『南北朝期公武関係史の研究』文献出版、一九八四年。増補改訂版が思文閣出版より二〇〇八年に刊行。『鎌倉時代の朝幕関係』思文閣出版、一九九一年。本郷和人『中世朝廷訴訟制の研究』東京大学出版会、一九九五年。市沢哲『日本中世公家政治史の研究』校倉出版、

二〇一一年など。
 (6)『鎌倉遺文』三二二三七号の「後醍醐天皇繪旨」は成輔が発給している繪旨である。書き止め文言などが通常の繪旨とは異なる。

(7)野村朋弘「鎌倉後期の持明院統と廷臣」(『國學院雜誌』一〇四卷七号)、二〇〇三年。『花園天皇宸記』に登場する廷臣達を抽出し持明院統に付き従う廷臣が極めて少ない状況を論じたもの。

(8)両統迭立時期の通史などは、網野善彦『蒙古襲来 転換する社会』小学館、一九九二年をはじめとする概説書に拠る。

(9)『花園天皇宸記』は史料纂集より刊行。全三巻。八木書店。

(10)宮内庁書陵部所蔵「花園院宸記」の写真帳を確認する限り該当条の人名の字は「維輔」である。但し維輔は管見の限り同時代に存在せず、記事の内容から成輔に関わる人物であることが分かる。前年の末久領に関わる記事に平惟輔は登場している。そのため、『史料二』の元亨三年十月十七日条に登場する「維輔」は「惟輔」と比定するのが妥当だろう。

(11)『花園天皇宸記』元亨二年三月十五日条をはじめ、元亨二・三年には末久領に関するやりとりが頻出する。特に元亨二年三月十九日には、この時点では花園院にも近侍していた日野資朝が使者として惟輔のもとへ訪れ交渉を行おうとしたが、「他行物語」のため会えなかったことなどが記さ

れている。末久領の由緒については、元亨二年九月二十九日条の裏書にある「長嗣遺跡事」に詳しい記述がある。
 (12)『太平記』巻二「関東調伏の奉行はるる事」。

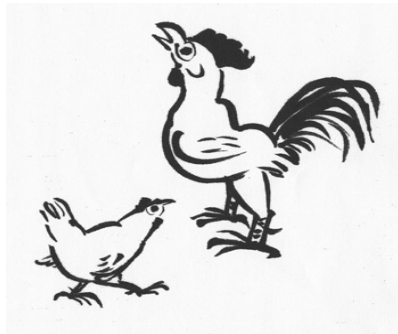
(13)『太平記』第一巻「俊基資朝臣の事」。底本は註(12)と同じ。

(14)『花園天皇宸記』元徳元年十二月別記の十二月二十八日条に参任する公卿として中院通冬らとともに、成輔は記されている。

(著者略歴)

一九七五年北海道生まれ。國學院大學大学院で日本中世史を専攻。現在、京都造形芸術大学准教授。

編著に『史料纂集 氏経卿神事記』一(二〇一六年・八木書店)、『日本文化の源流を探る』(二〇一四年・幻冬舎)など。



(カット 内田美枝子)

徒然なるままに

—忘れられた地名(三)—

「早川上水・鍋町」

杉山 虔一

今回は「早川上水・鍋町」を書きます。

前々回、ご紹介した『大日本地誌大系新編相模国風土記稿(雄山閣版)』巻之二、足柄下郡小田原宿に早川上水が、紹介されています。抜粋ですが、

「西方板橋村にて早川を分水し、山角町圓光寺境内より東海道の大路を疎通し、東方新宿町より江戸口外左右の池に流れ入り、此を今蓮池と呼り」と記されています。すなわち、現在小田原上水と呼ばれている水路は、江戸時代には早川上水と呼ばれていたことが分かります。

では現在早川上水は消えてしまったのでしょうか。そんなことは無く、現在浜町四丁目(第十

六区自治会)が写真のように標柱できちっと表示しています(写真1)。道路に面しているの

で、一見したことがある人もおいでになるでしょう。筆者は、この様な努力に対して拍手をしたと思います。

そして、この標柱の裏側には、「鍋町」の事が、書かれています(写真2)。この町名も、現在では、ほぼ忘れられた地名であるにも関わらず、この様に記録して繋げる努力を、賞したいと考えます。

この鍋町も『新編相模国風土記稿』では、古新宿の小町として「鍋町」の二文字が書かれているだけで、二四六号でご紹介した「酒匂鍛冶」のような表記ではありません。北条氏時代から鑄物師の居住地であったと言われているのに、寂しい限りです。



写真1

写真2

小田原の郷土史再発見

広島にある「北條氏直の墓」

石井 啓文 ひろふみ

はじめに

天正十八年、北條氏直は豊臣秀吉に降伏し小田原を開城すると、高野山で蟄居謹慎を命ぜられ一年後の秋に他界している。

しかし、何処に葬られたのであろうか。箱根早雲寺の北條五代墓は、寛文十二年(一六七二)狭山北條氏四代氏治が早雲の命日(百五十年忌か)に寄進した供養墓で、氏直の埋葬墓は知られていない。あるいは、秀吉に背いた罪人であり墓建立が許されなかつたか、それともそうしたことが憚られたのであろうか。とすれば、伝心庵跡(小田原駅前)の氏政・氏照墓碑も当時のものではないかも知れない。両墓は江戸時代に稲葉氏の再興と記している(『小田原市史』)。

広島の北條氏直墓

文化九年(一一八二)刊『小田原編年録』(以下『編年録』と略す)の北條氏直の記述が注目される。

①北條氏直(前略) 文禄元年(或ハ天正十九年、寛永譜天正十九年)十一月四日(於大坂)卒三十一歳、

松巖院大圓徹公大居士。安藝佐伯郡草津海草寺二葬、今草津二北條屋敷ノ跡アリ(後略)

文禄元年は天正十九年が正しく、安芸佐伯郡草津は現広島市西区草津で、海草寺も久遠山海藏寺(曹洞宗、広島市西区田方)の間違(誤植か)である。「北條屋敷跡」があつたという。どういふことであらうか。

著者間宮士信(ことのは、享和元年(一八〇一)に林大学頭に見出され昌平坂学問所勤番に推挙される。文化七年(一一八〇)、所内に地誌取調所が置かれ書物取調出役(しゅつやく)を命じられ、同九年調方(しらべかた)総裁に進み『新編武蔵風土記稿』を始め多くの地誌典籍を編纂している。天保十二年(一八四二)、心血を注いだ『新編相模国風土記稿』の完成を目前にして没している。

『編年録』復刻版の編者杉山博は、士信の祖先は代々小田原北條氏に仕え、四代豊前守康俊が秀吉の小田原攻めの際、伊豆山中城で戦死、その後を弟の綱

信が嗣ぎ小田原開城後徳川氏に仕えて、綱信の子正重が士信家の祖となつた。このため、士信は北條氏と徳川氏に優恩を感じて『編年録』を編纂したのであらうと言われている。

小田原有信会の『史蹟調査報告』(昭和六年度)で、瀬戸秀兄(小田原藩士子孫)も「小田原史稿本編纂の時から、北條氏直の墳墓(實葬地)に就き、尚ほ精査研究の足りない事を自覺してゐた。一昨年の秋頃、或奇縁から氏直の墓所が大阪天満でんまにあることの靈的暗示を感得した」として、大阪の知人に調査を依頼、探し出したとの知らせに驚喜して現地を訊ねたのであるが、それは氏直ではなく氏規(氏直の叔父)の墳墓であつたという。今から八十二年前、専念寺(浄土宗、大阪市中央区上本町)を訊ね篤い想いを語る先人がいた。これに報いたく広島市の海藏寺に問い合わせてみた。

広島史料と符合

海藏寺ご住職福原正英師より、次の二点と中国新聞(昭和六十二年九月八日付)収載の「石のかたち」と題した氏直墓の記事もお送りいただいた。関係箇所を要点のみ記す。

②寛文三年(一六六三)刊『芸備国郡志』(黒川道祐編)

海藏寺 在佐西郡草津山上、爲曹洞宗、海岸上一望可極千里之眼、山名久木山、堂前有北條氏直之墓、想前代北條氏恩顧之人領此所、爲氏直設之乎
北條氏直墓 在佐西郡草津海藏寺、未知因何而在于此乎

③文政二年(一一八九)『國郡志御編集二付下しらへ書出帳』
禪宗海藏寺 當郡佐方村洞雲寺末寺、九品山与唱へ來り(中略) 古墓三ヶ所 白翁宗雲大居士 天正十九辛卯年十一月朔日 右北條左京太夫氏直公之墓(後略) (『新修広島市史第六卷』)

②は、広島城主浅野家三代綱晟の命により儒医黒川道祐が編集した領国の沿革等を記した地誌である。草津海藏寺に北條氏直の墓が記され、①史料が裏付けられる。また「北條氏恩顧の人がこの地を領して設けたのであらう」と記すが、「未知因何而在于此乎」(どうして此にあるかは知れない)ともある。

③の法名「白翁宗雲大居士」は、早雲寺等の①とは違うが、当時の海藏寺住職の諡名(おくりな)である。付与した僧侶が違えば当然のことであるが、「宗雲」が注目される。おそらく、過去帳の法名であらう。また、忌日の十一月朔日は、四日が史実とされている。こうした若干の違いは



広島北條氏直墓(海蔵寺)

あるが①の七年後、文政期の史料で①と符合している。

ただ福原正英師は、氏直の墓は宝篋印塔であるが記銘が全くないと言われる。あるいは氏直が豊臣氏から見た反逆者であることに憚られたのだろうか。ただ、中世から近世初期の墓塔無記銘は少なからず見え、拘泥することはないかも知れない。

宝篋印塔は、鎌倉時代中期以降「宝篋印陀羅尼経」を納める供養塔として造立されたが、室町時代末期から江戸時代前期には、死者の供養塔や墓碑として盛んに用いられている(『国史大辞典』)。時代は氏直他界時に相当している。

また福原正英師は、①の「北條屋敷ノ跡」については「聞かれたことは無い」と言われた。伝承が失われたのであろう。

中国新聞の記事は、氏直墓の史料に造立の経緯が触れられてい

ないが、何かの因縁があつたことは示しており「広い墓地の中に、ひっそりとたつ宝篋印塔から、戦国末期に強大な権勢をもつ秀吉に対抗した武將を偲ぶようですがどこにもない。しかもその形は、辺りを取り巻く巨大な五輪塔とは対照に質素

だ。草津が氏直最期の地かどうかはともかく、笠の彫りに中世末期の手法をとどめるこの小塔には、戦国の世を凌ぎきれなかつた北条家総領の末路の哀れさをとどめる」と結んでいる。以上、ここまでは平成十九年に『おだわら風土記考』第九号に掲載された拙稿の要約である。

萩藩士が記す北條氏忠夫妻

本誌二四五号「西国で継承された北條氏と伊勢氏」をまとめたから気がついた。

明治三十七年に元萩藩士近藤清石編纂の『山口県風土誌』には、「大方は豊臣太閤が北條氏を征し、氏勝(氏忠)及び其女ヒメメヂを合せて毛利輝元卿に預けらる。之を安芸国草津に置く。(文禄二年)氏勝(氏忠)草津に没し、大方母子関ヶ原陣の時大坂に赴く。秀就の代に至り母子旧縁を以て萩

に來れり」とあつた。なお、大方は北條左衛門大夫氏勝(ママ)(氏忠の間違い)室である。

氏直が高野山に蟄居して宥免後に他界、同行した北條氏忠(氏直叔父、氏堯の子で氏康養子説あり)は妻子と共に毛利輝元に預けられ、「広島草津」に住んだとある。①史料の「北條屋敷跡」は氏忠が住んだ屋敷跡であらう。

氏忠は草津に來た時、氏直の遺骨か遺品を持つて來ており、それらを宝篋印塔の下に葬った。海蔵寺過去帳に「氏直墓」が銘記されていたのであろう。

氏忠は草津に來て二年後に没している(逆修か、後述)が、妻子は慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原役までの九年間余を北條屋敷で過ごしていたことになる。

下野唐沢山城主佐野氏忠

佐野氏忠は、

北條氏康の六男(正確には七男か)とされるが、氏

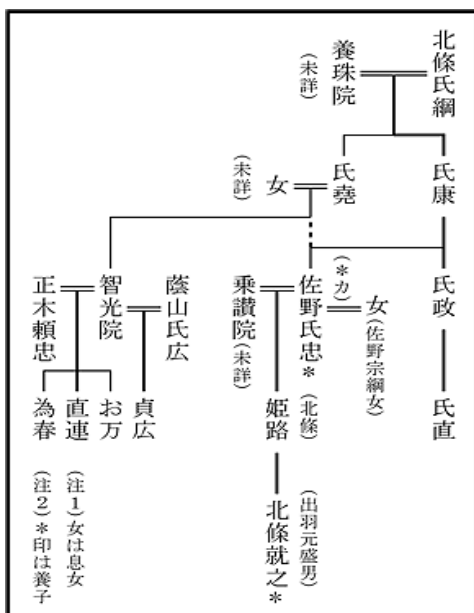
康の弟北條氏堯

(氏綱四男、小机城主)の子で、氏康

の養子との説が有力視されている(略系図参照)。

天正十三年(一五八五)下野唐沢山(栃木県佐野市)

北條氏忠縁戚略系図



城主佐野宗綱が、長尾頭長との争いで戦死すると、重臣たちは養子を迎える先を北條家か佐竹家かで争った。評定の結果、北條家に決まり氏忠が宗綱と養子縁組して佐野氏を継いだ。宗綱の弟(叔父とも)の佐野房綱(天徳寺宝術(ほうえん)を称す)はこれに憤慨して出奔、織田信長を頼り本能寺の変後、豊臣秀吉に接近している。

養子縁組当時、氏忠は足柄城を守っており四十歳前後の壮年であつたらうという。唐沢山城に入ると佐竹派を一掃し自らの家臣で支配を確立している。そして、父氏康からは他家を継いだ兄弟よりも大きな権限が与えられていたようである。「桜鬱」の朱印を用い独自の内容を記す発給文書が多く現存し、小田原からの奉行人の派遣は見られない



河津の北條氏忠墓
(林際寺裏山)

正確ではなかった可能性が出てきた。その記載は逆修(ぎゃくしゅ) 供養日とするのが妥当になろう。(後略、黒田)

「逆修」とは、生前にあ

(『後北条氏家臣団人名事典』下山治久、以下(下山)と略す)。

同十六年正月には相模新城(足柄上郡山北町)の守将を務め(『諸州古文書』)、同十七年七月には真田昌幸から上野沼田城(沼田市西倉内町)の割譲による請取人も務めている(『北条早雲とその一族』黒田基樹、以下(黒田)と略す)。

天正十八年の小田原合戦では小田原籠城。開城後は氏直に同道して高野山に入る。同地では、高野山高室院に氏直の居住を依頼している(『集古文書、下山』)。

佐野家は秀吉により出奔していた房綱が復帰し、養嗣子佐野信吉が佐野家を継承している。氏忠の正室は佐野宗綱の娘であったが、房綱養子の信吉と再婚している。離縁したのであろうが年月は判明しない。氏忠は佐野入以前に乗讚院を迎えており、二人の間に娘姫路が誕生している(下山)。

萩資料によると、氏直宥免後の氏忠は一家で毛利輝元に預けら

れ広島草津に在住、氏忠は同地で死去を記し、慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原合戦後、乗讚院母子が長州毛利家で知行百石を与えられていた。

氏忠没年は、逆修か？

『日本歴史』(平成二十五年十月号)収載の「小田原落城後の北条氏一族」(黒田)によると、氏忠は文禄四年(一五九五)広島草津に在住の史料が見つかった。神宮文庫所蔵の『御師関係文書断簡』全十四冊の内の「文禄四ひのとのひつち」京・大坂之御道者之賦日記 上田大夫/拾月廿七日で、北條氏規一家と北條氏邦・氏忠・氏光・直重・直定等の氏直高野山蟄居宥免後の在所が分かる貴重な史料である。氏忠の記述部分のみを記す。(前略)「北条左衛門助殿様(氏忠・氏康六男カ) / 只今ハあきノ草津と申所ニ御座候」(中略)

氏忠は、これまで伊豆林際寺の過去帳記載から、文禄二年四月八日に死去したと見られていた。この史料の出現により、氏忠は文禄四年当時も生存していたとみるのが妥当となるから、過去帳記載は

らかじめ自分のために仏事を修して死後の冥福を祈ること(広辞苑)で、多くは墓も建立している。

つまり、氏忠は広島に来て氏直の墓を立てた際、自らの墓塔建立の必要性に思い至ったのであろう。文禄二年(一五九三)四月八日に伊豆河津に来て自らの墓を立て「大関斎」と号した。

同地の林際寺(臨濟宗、賀茂郡河津町沢田)に氏忠の位牌と墓がある。法名は大関院殿太嶺宗大居士といった(『林際寺過去帳』黒田)。

では何故伊豆かという点、氏忠は、氏堯(氏綱四男)の子説を記したが、河津城主蔭山氏は氏堯の女婿(氏忠の姉か妹と再婚)で「氏」は氏堯の偏諱であろう。氏忠とは義兄弟であり高野山へも同行している。また、河津は氏堯の所領でもあり、林際寺宛の氏堯朱印状も現存している。

蔭山氏は、初代由広から広親・広忠・家広・忠広と続き、六代が七郎左衛門氏広で家康側室お万の方の養父でもある。お万の方は実母智光院が氏忠と(義カ)兄妹(姉弟カ)である。このためか七代貞広は、千二百石の旗本に召し抱えられている。このことは又の機会に述べたい。

氏忠が広島で死去しながら、河津に墓があることを訝しく思っ



萩の乗讚院墓(海潮寺)

ていたが、河津の氏忠墓塔が逆修によるものとすれば全てが納得できる。おそらく、その後の関ヶ原役までの間に氏忠は他界したのであろう。

氏忠の草津在住は二年余と思っていたが、二年以上九年以内であり、より「北條屋敷跡」の存在と氏忠による「北條氏直の墓」建立の確実性が増したということである。

後記

これまで、広島草津にある「氏直の墓」は、地元でも何故草津にあるのか判明していなかった。私自身、『編年録』の記述を知り忸怩たる思いがしていたが、萩資料から氏忠の草津在住の期待が膨らみ、黒田基樹氏の新史料発見で草津在住が立証され、「北條屋敷跡」と「氏直墓」もほぼ実証に近づいたと思う。

過日、草津の海藏寺を訪ね、氏直墓の小さいのに驚かされた。一

瞬ネットで見えた河津の「氏忠墓」

(上部欠落カ)が脳裏を過ぎった。中国新聞の記事にあった浅野本家家老家の大きな墓石の乱立が目に入ったためもある。墓石を眼前にして胸を締め付けられた。花が活けられており、ご住職の配慮に対する感謝の想いにもまた篤いものがこみ上げてきた。

その翌日、萩の海潮寺(曹洞宗、萩市北古萩町)を訪ね乗鑽院の墓参をした。萩資料にあった昭和五十三年の写真の通り「伊勢氏墓地」の石標、墓は玄武岩二層の白石の上に桃色の万成(まんなり)石は珍しく目を惹く。不完全な宝篋印塔であるが乗鑽院の「殊深榮法大姉」の刻銘が読み取れる。息女姫路の墓はなく整理されたのであろう、と萩資料も記していた。

乗鑽院は、私が昨日訪ねた広島草津で夫君氏忠と共に北條氏直を弔い、その後氏忠も亡くし、関ヶ原役後は息女姫路と共にここ萩で過ごしたことが偲ばれた。

小田原に帰宅後、海蔵寺福原正英師に「氏直墓」の大きさを確かめたところ、宝篋印塔の頂部は欠落しており、台座(後世の石材)を含めた高さは93センチ、本体のみは75センチと教えられた。当時としてはそれ程小さいわけではない。周囲の状況から感傷に落ち入っていたことを知った。

小田原史談会セミナー 要旨

第十五回 平成二十八年十一月十九日 「火山の国イタリアと日本」

講師 杉山 浩平氏

東京大学総合文化研究科 特任研究員

火山の地を掘ると何が分かるか 巨大噴火は火山灰、火砕流、泥流、溶岩流により甚大な被害をもたらすが、一瞬にして火山噴火により埋没した遺跡は、往時の自然・文化環境が保存されて、歴史復元のための情報の宝庫である。

火山灰に埋まった鹿児島県橋牟礼川遺跡などで噴火当時の生産活動や生活が明らかになった。長周期で起きる大災害は少なくとも過去一万年の考古学、歴史学、火山学などの共同研究が必要。

ソンマ・ヴェスヴィアーナ遺跡 紀元七十九年に埋没したイタリアのポンペイ遺跡はヴェスヴィオ山の南麓にある。これに対し、ソンマ・ヴェスヴィアーナ遺跡はヴェスヴィオ山の北麓にあり、四七二年の噴火で埋没した。この遺跡は一九二〇年代に偶然に発見され、発掘調査されたが



大理石女性像

中絶した。二〇〇二年から東京大学が継続的に調査している。石造建物、大理石の女性像と男性像、ギリシャ神話をモチーフにした壁画が出土した。また、ワイン醸造の瓶が出土した。二世紀に神殿として建立され、のちにワイン醸造工場になった。出土した土器はチュニジアなどで製作されたもので、地中海交易の状況が分かる。ポンペイの埋没以後のローマ時代の様相が明らかになった。

富士山と遺跡の発掘

自分が発掘した南足柄市五反畑遺跡で富士山の火山灰層の下から縄文土器が出土した。火山灰の化学組成分析から土器出土層の火山灰は縄文時代後期末葉と推定される。考古資料と火山放射性炭素年代測定によると縄文時代後期中葉から末葉までの三〇〇〜四〇〇年間は富士山の噴火活動期であった。この時代に神奈川県西部で縄文遺跡が激減する背景に噴火活動による天変地異があった。

災害史を未来に語り継ぐ 仙台市杵形遺跡二〇〇七年の

発掘調査で巨大津波痕跡を確認したが、東日本大震災前で注目されなかった。発掘調査で文化環境、自然環境を復元し、過去の自然災害を明らかにし、地域で災害史をどのような形で語り継ぐかが重要である。(山口 記)

平成29年度「小田原史談会」総会・講演会のお知らせ

下記により「平成29年度小田原史談会総会・講演会」を開催する予定です。会員各位には予定の確保をお願いします。なお、詳細は次号で再度お知らせします。

日時：平成29年5月6日(土)

総会 午後1時より 平成28年度の報告並びに平成29年度の計画

講演会 午後2時より 講師、演題交渉中 (詳細は次号にて)

場所： UMECO 会議室1, 2

片岡日記 昭和編(八)

片岡 永左衛門

きあり。

ふた取れは湯気あた、かに老妻の

今日は冬至とたせしふるふき

昭和二年十二月

十九日 半曇

二十日 晴

夜来降雪。今朝は銀世界。

鉢植のまた散りあへぬ紅葉はの

いた、きしろく初雪のふる

二十一日 晴

重役會二本店に行き七時帰宅。

廿二日 晴

道徳教會より晚餐の招待を受け五時半帰宅。

大正十年頃道徳教會より拙者個人ニ保管を懇
談依頼有りし公債金壺千円壺通、金百円参通
は、安全を斗り関東銀行の金庫ニ仕舞置しニ、

斗らずも震災に焼失し番号も不明となり困難
を感せしニ、先年其計算をなしたる帳簿ハ宝
安寺村山大仙の保管せしニ、全寺も全壊全焼
し、如何とも致し難かりしに、四日後の大正十

二年九月五日不思議ニも全焼中より其帳簿を
掘出し為に都合よく、先日政府より新券の引
渡を受けたれば、其事ニ奔走せし拙者等数名
に會より慰勞の晚餐なり。

廿三日 雨

小田原中学校付重富中尉来談。歩兵五十七聯
士官見学ニ付史談の依頼有し全行。山木旅館
にて聯隊長歩兵大佐藤信亮外士官拾数名ニ
講演。午后四時過ぎ帰宅すれば夕膳にふるふ

廿四日 晴

午后より国府津嶋田氏淘席、五時半帰宅。

廿五日 晴

午前九時より大正天皇遥拝式ヲ第一小学校々
庭ニテ執行。

本店ニ行く。

廿六日 晴

関東銀行整理据置預金本日より仕(支拂開始。
午后より本店ニ行。午後九時帰宅。

廿七日 晴

預金仕拂ニ昨日は雑踏せしニ本日ハ平常と相
違なく相應に預金も有りし。

先日講演の謝礼なるへし。重富君より梅の鉢
植を贈らる。

塩商人の談話ニ近來當地ニ於て塩の売行き減
少せしは、香の物ハ従來澤庵漬を多く各家に
て食用せしニ、野菜の栽培の近村ニ発達ニ随
ひ、新漬の食用次第に増加せしを、味噌醬油の
製造ハ大量の醸造ニ有利ニテ、少量の醸造不
利益の為メ地方の醸造家ハ廃業する者多き為
なりと。

廿八日 晴

廿九日 晴

整理の据置き預金ノ拂出も一昨日ニ引替昨日
より安定、意外ニ少なく、此分にては豫想以上
の預金ヲ振替となり好成绩を収めへし。

三十日 晴

三十一日 晴

本年ハ世上一般の不況に加へ、當地方は昨年
いかの稀なる大漁に濱方ハ相應の収入有りし
に、今年はいかは勿論其他の魚類甚しき不漁。
岡物は、米は豊作なるも安價、温州みかんも豊
作の為に下落し何れもよろしき物なく非境二
年は暮れたり。

歳暮
かなしゆく汽車のひ、きもおのつから
耳にせわしく年はくれゆく

昭和三年 一月
一日 晴
例年の通り御幸の濱に出れば空晴れたれとも沖
曇り暫くた、すみ松原社を参拝して帰る。
大空らは晴れ渡れとも沖きくらく
昇る初日も雲にこもれる
十一時より新年交賀會ニ出席、尾崎、大蓮寺、
岡田氏ニ立寄り帰宅すれば田邊静雄氏来賀、支
那の近況を聞く。
二日 雨
ひる頃より雨はやみ日かけ見ゆ。
いろ玉を枝にぬきしか日のてれば
松にむすひし雨の白露
午後、小宮君来賀。夕刻より関、石黒、田邊氏ニ
訪賀。
三日 晴

午后、親一升本氏縁談にて秦野に廻り帰省。九時発にて帰宅。
中山每吉氏還曆と聞き乞る、ま、色紙を贈る。

中山每吉翁の還曆を祝ひて
いにしへのあとをいくよもたつぬらむ
六十ひと、せよ始めとはして

四日 晴
九時出勤、四時退出した。昨日は吉田と江嶋にて長嘶をなし二時頃二帰宅した。昨日迄は近年なく落付た新年をしたか市中ハ不況か何處となく見へた。

五日 晴

六日 晴

七日 晴

八日 晴 日曜

午后、今井氏往訪、談笑数時。

九日 晴

午后より淘席初會。

十日 雨

非常の暖気。

十一日 晴

三時発にて上京。親一方ニ止宿。久々にて甚よし亭ニ落語色ものを面白く聞く。

十二日 晴

吉川講社初會ニ出席。了て皆傳會ニ列席、七時半発にて九時半帰宅。

十三日 晴

十四日 晴

十五日

昨夜より小雪。国府津淘席初會ニ出席。五時半帰宅。

十六日 晴

昨日より松原神社神輿渡御。當社神輿は維新前ハ黒漆塗の疎造にて毎年破壊する例なりしニ、神佛分離より白木造りトなし破壊の弊風を禁止したるに、大正十二年の震災に神社ト共ニ焼失し昨年新調したるに諒闇にて渡御なく本年初ての渡御なり。以前の神輿より少しく小形にて彫刻は以前より多くなりしと思はる。諒闇明にて各町も活気を生し花車(山車)だしも八個を引出し、市中大二賑ふ。

十七日 曇

十八日 雨

十九日 曇

大橋、若江両先生御出席にて淘席。

廿日 晴

午后より福住新年會ニ出席、十時半帰宅。
小室翠雲に依頼せし足柄史料の挿画竹内氏持参。富士の画にて出来面白し。

今日をまちあすと思ひの雲はれて

光りまはゆき富士のみつ峯

廿一日 晴

午后より大蓮寺二行き五時帰宅。

廿二日 晴

梅村氏會葬ニ親一來り、八時帰京。

廿三日 雪

午後より退出。

そら寒むく霜にやつる、庭もせに
玉かと赤し南天の実の

廿四日 晴 雨

勝俣に行き翠雲富士の裏打を頼む。

廿五日 晴

廿六日 晴

午後、大蓮寺に至る。

廿七日 晴

足柄史料ニ掲載の為小田原旧城にて撮影、大蓮寺ニ至り吉田家佛事へ参拝。

廿八日 雨

廿九日 晴

三十日 晴

三十一日 晴

本店ニ至り支配人ニ面會、辞任ノ件ヲ協議了テ東京ニ至り親一方ニ止宿。

昭和三年 二月

一日 晴

明治神宮ニ参拝。品川より乗車、帰途銀行ニ立寄しに竹内氏より清浦子爵の題字届き居たり。足柄史料の序文ハ蘇峯、如電両先生の筈なりしに、竹内氏の好意に勧告さる、ま、余り希望せざるも小室翠雲画伯に席画を依頼せしに、又拙者に無断にて好意の心なるへし、清浦子爵に題

字を揮毫せしめ贈られたり。史料の題字としてハ希望すれハ他二人も有るへきも止を得ず挿入せること、せり。

二日 晴

三日 晴
支店長の辞任願書を提出し、帰途今井氏ニ立寄り、四時帰宅。

四日 晴

辞任の辞令受取る迄ハ出勤の筈にて、今日も出勤。帰途尾崎ニ立寄り。

五日 晴 曇

横濱高田ニ至る。上野実夫妻にて来訪、久々に面會。五時帰宅。

六日 雪

昨夜半より降雪一寸も積れり。若江先生御来車、洵席四時閉會。

七日 晴

八日 晴

九日 晴

十日 晴
足柄史料出版の件ニテ横須賀松村印刷店水野来談。原稿遣す。

十一日 雨 雪

昨夜より雨、雪。

岡田小三太一周忌佛事ニ至る。

衆議院議員候補者鈴木英雄應援ニ親一來る。今明日各地にて演説の應援なり。

十二日 曇

小田原実業團第一回バザー小峯にて開催、売店ハ勿論、余興有り、大賑賑ヒ。

十三日 雨

昨夜より霽雜りの雨。箱根足柄丹沢も大雪にて箱根は三尺余なりと。

十四日 雨

十五日 晴
竹内君来り、小田原図を写真す。午后より国府津洵席、夜は外郎洵席。

十六日 曇

午后杉山清吉葬儀ニ谷津宗円寺ニ至る。生木大黒より此辺迄ハ梅花多く花香浮動す。

帰途勝又殿より尾崎ニ立寄り、五時帰宅。

十七日 雨

十八日 晴

十九日 晴

史蹟名稱(勝)天然紀念物保存協會東京支部より見学の通知あり。午前六時発小田原急行電車にて新宿より乗替、池袋にて下車、武蔵野鉄道停車場ニ至りしに未夕予定の時間より早く、其附近を漫步し居たるに、協會の矢吹氏来り史談。

漸くして佐々木庄藏翁も来る。當駅より九時三十分発に乗車し秋津駅に下車すれば東京府ノ主任、當地の有志者数名の出迎を受け秋津神社ニ至る。當社ハ旧ハ荒神と俗稱し、其後不動尊を合祭し近郷の信仰も甚しかりしに、其縁日にハ參詣の群集するを目的とし諸方より博徒の集り賭場を開場し、其度毎ニ必ず鬭争をなし里人の

迷惑する少なからされは返て繁昌を稀とせざりしニ、神佛分離して秋津神社となり今ハ參詣も少なしとされとも、社殿の彫刻ハ甚た美麗なり。爰を出て武蔵悲田院の蹟を見しに、礎石は勿論瓦等も出土せざるも前住民の土器の破片ハ諸々に有り、二片を記念に拾得したり。氷川神社にて大小の石棒、石皿等を一覽し、新田氏の古戦場なる東村山の將軍塚の丘陵を遠望し野口の徳藏寺に至り国宝の元弘の板碑を見る。同寺に武蔵国分寺より持来りたる古瓦数片あり。其内ニ鬼瓦の破片壹個有りしか、是ハ最も稀有にて會員三輪善之助氏ハ保存方ニ付注意をなしたり。北多摩郡野口の正福寺にて、近く国宝に指定せらるへき鎌倉時代の建築なる地蔵堂を見て同寺にて中食したり。是より東京市東村山の貯水池ニ至る。周圍三里余にて道路も完全し茶見世も諸々にあり殆ど公園にて、慶事には観覧の人出多く今日も日曜なれば自働(動)車にて数組の見物人あり。府の好意にて貯水池を発働動船にて渡る。池中及び附近ハ禁猟区なれば数万の鴨ハ群をなし浮遊す。船を下り武蔵狭山第一番山口觀音に參詣、怪敷朝鮮鐘と新田義貞誓の桜を見て帰途に就く。

いにしへのあとをたつねて春の日は

夕暮れちかし多摩の村山

東村山より自動車、西武鉄道の東村山駅より乗車し高田馬場にて乗替、又新宿駅にて小田原急行に乗り、九時半無事二一日の清遊を終りて帰宅せり。

廿日 晴

関東興信銀行小田原支店後任杉岡氏、藤永支配人と着任。彌々本日より退職す。

七十年前の小田原の街
— 府川角蔵『小田原廻り』より抜粋

昭和二十一年十一月から昭和二十三年六月までの小田原新聞紙上に、社長である府川角蔵が連載したのが「小田原廻り」というコラムです。当時、とても好評を得ていたらしいですが、当時の店名や、符丁が今どれだけ分かるでしょうか。この中のごく一部ですが、今回、映画館に関連するところを抜粋して転載します。

大都会でお茶をのみ、富貴座をのぞいて出てくると、美奈登の小料理待っている。青物町へ出てみると清風楼の香りの良いのがプリンと鼻に付いたと思ったら、やつこ踊りのヤキトリ屋、どうぞこちらへいらっしやい、ソレはしばらく、入船待つて成金で、良い気分です踊りの観物、料理のあじあいたしませう。(中略)

今日は青物町を廻ってみよう―復興館と高野理容館が何れも盛んにやつてる、寿おでんに野沢物産見て通、藤本薬局の優しい主人が目についた、東邦生命の活動家、みどり屋かみ結さんがこの奥で景気が良いと評判だ、(中略)。ひっこんでるのが三河屋の鳥肉で、目立ってるのが丸京の染物屋、関口小間物店には浦町美人がお嫁入り、三

政喫茶店の香りの良いのに立ち止って引返す。

今日は御幸座附近へ行つて見る―この頃の御幸座はいつも大入りを見せているが安藤さんの経営から銀行の所有になり曾我さんが健康を害するほどに努力の効がよく判る。新村理容館が当り出し若主人の愛嬌顔と技術が良いのが大きな鏡にうつつてる。(中略)

東宝館と清友館が中央で東宝館の前にオスミの持参金映画見物客が行列で井上東宝支配人が入口で静かな顔で監督だ。ソノ前が喫茶店のライオンと日進が軒を並べて競つてる。元三十五区の事務所あり、安間小児科医院と石塚耳鼻咽喉医院もここにあり、黒崎齒科の女医さんもこの通り、チャップリン跡が喫茶店、ソノ隣りの亀の子喫茶店のテーブルはウマイ香りが並んでる(中略)

新生映画館オリオン座は小田原の井上常三、だるま、江島屋、市川あわび店、大磯加治、山北の瀬戸弁当屋の六人が合資組織の有限会社だが、これが出来て富貴座、復興館、東宝の三館と御幸座にどう影響するかと思つたらホンの心持、さほつた程度でいまにお互いに良くなるだろうの見通しだ。映画や芝居の存きな者は順々に観て廻るのが通例だという。(文責 荒河)

旅のつれづれ俳句日記

劍持 芳枝

そろそろ冬も間近のある年、史談会一行四十五名は伊豆箱根バスで、一路湖東三山への旅に向かった。富士川サービスイリアと養老で休憩し予定より早く、十一時三十分彦根に着き昼食となった。一時には多賀大社へ。延命祈願と縁結びで有名なのださうだ。七五三のお祝いの家族で大分賑わっていた。

西明寺では石段を何段歩いただろうか、足の弱い人達は庭で待っていた。紅葉の中に不断桜が見事に咲いていた。紅葉によく映える鎌倉建造の優美な三重塔の壁画はさすがに重文だと思つた。金剛輪寺の庭も素晴らしかった。「血染め紅葉」と呼ばれる深紅の紅葉が有名で本堂は国宝にされている。最後の見学は百濟寺。聖徳太子が創建した古刹、湖東三山にあつては最古の寺で、平安時代に天台宗の寺院となり湖東の小比叡と称されている。美しい庭園にしばし足を止めて言葉もなかった。

秋冷や寺の晚鐘遠く聞く
夕ぐれの尾花の風に喉喝く

日が短いので雄琴へ着いた時はもう辺りは薄暗くなっていた。昨日はずい分歩いたので心配したが、よく眠れて朝の気分は爽快だった。だがどうやら外は小雨が降り少しかかり、浮御堂を背景に写真撮ったり撮られたり、名物の落雁をお土産に買った。安雲川の中江藤樹記念館を見学。十一時すぎに奥琵琶湖パークウェイのレストラで昼食となった。午後は港から船で竹生島へ。天気がよければ遠く山々もよく見えるだろうに残念だった。竹生島まで約三十分ほどだった。揺れもせず快適な船旅だった。島の周囲はすべて断崖で船からも高い所の観音堂がはっきり眺められた。此処でも石段。でも折角夢にまで見た竹生島に来たのだからと、気を引きしめて登つてお参りしてきた。下で待っている人も大分いた。立派な建物、彫刻、蒔絵など見られ本当によかった。小雨はまるで時雨のように降っていたが、遠くに霞む美しい風景を眺め、い、旅の思い出が又私の心を癒してくれような感慨に、しみじみと嬉しくて、行つてきてよかつたと心から思つた。

行く秋を惜しみて綴る旅日記

晩秋紀行 甲斐路史跡と美術館

田中 豊

夜来の雨に今回の旅は…と半ばあきらめ境地も、小田原駅に着く頃には高く澄みきった秋の空が広がり、昨年度は諸々の事情から中止せざるを得なかった気分を洗い流してくれた。

その故ではあるまいが、集合時間には参加者三十三名(一名病欠)は集まっていた。西口で参加される九十一歳になられるというN先生に久しぶりにお会いし、「若くなつたね」と声をかけられ驚いた。

秋の陽を膝に遊ばせ バスの旅

予定通り八時に出発したが、圏央道を往く予定が事故のため渋滞しているとの情報で、急遽小田原厚木道路を小田原東インターで降り、東名を御殿場に向かい東富士五湖道路経由に変更となる。籠坂トンネルを抜けると周りはもう晩秋の気配、紅葉が進む山々は深い錦を織りなし、バスの窓から林越しに見え隠れする富士は頂を真っ白に化粧がすすみ、霊峰にふさわしい気品を醸えていた。

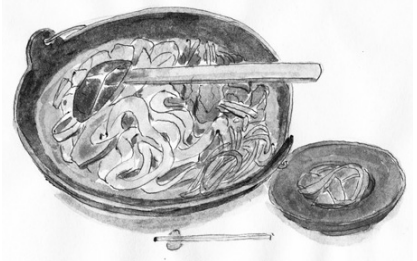
車内では先導役の飯田理事の克明な説明と共に、平倉会長の挨

拶を聞くうちに、早くも谷村SAに到着。休憩ののち一路中央高速に入り、今回の歴史説明役石井啓文氏の第一回目レクチャーがあった。山梨県は観光に対し熱意のある県で常に新しい碑や説明がなされているという。

更に石井氏による武田氏と北条氏の関係についての克明な説明を聞くうちに、早くも韮崎の新府城址に到着。韮崎市教育委員会の関根氏の出迎えを受け、早速に「新府城址」について概要説明を受ける。

天正三年(一五七五)の長篠の戦いで織田・徳川連合軍に大敗した武田勝頼は、武田軍団が誇る山県昌景、馬場信春、内藤昌秀の武将を失い、家訓の「疾如風 徐如林 侵掠如火 不動林」に従い躰榴ヶ崎だけでは防ぎきれないと、突貫工事で新府城を築いた。勝頼としては新しい武田氏を新府の地で構築するという希望に満ちていたと想像を膨らませる。

紅葉する山林と遠くに眺望する八ヶ岳が素晴らしいパノラマを成していた。城といえども当時の城はまだ石垣はなく、自然を生



かした塚が巡らされ起伏に富み、更に上部に土塁を盛り上げた城郭は、本丸に達するには周囲を廻る構造になっている。当時は現在よりも樹木は低かったろうから、下から攻めるには想像以上に困難を要したに違いない。

落葉の中を歩くのは我々年配層には少々辛くはあれど、落葉の絨毯を敷詰めた道は足底に心地良く懐かしい感触、どんぐりなどを拾った遠い思い出を蘇らせてくれた。現在もよく整備されており、所々に伐採した樹木が積み上げられていた。しかしこの城も連合軍の攻撃の前に、勝頼は僅か二ヶ月で放棄したという。

朴落葉 地面に吐息のこしけり

再びバスに乗り四〇分ほ



武田八幡宮

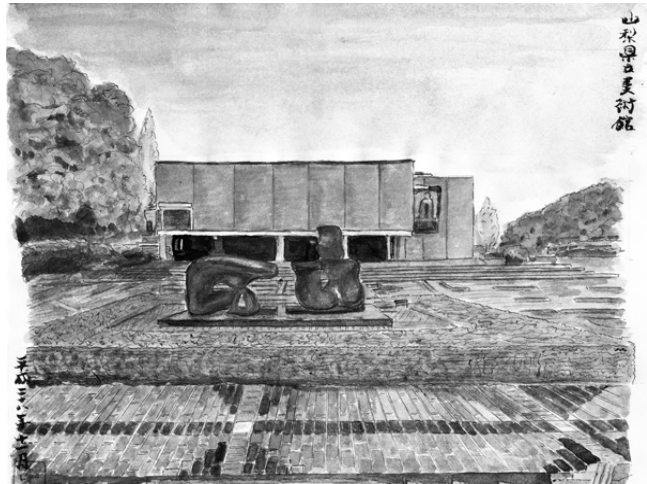
ど行けば武田八幡宮に着く。この宮は日本武尊の御子、武田王がこの地に封ぜられ、亡くなった際に土地の人によって居館跡に祠が建てられたのが起源という。土地の人達の氏神として深く崇拜されたこの宮は素朴な神社で、勝頼夫人の桂林院(北条氏康娘)の手による戦勝を祈願する願文が残され衆目を集め、碑や軸として公開されていた。

本殿は檜皮葺で信玄の造営と伝えられ、棟の杵形は珍しく鬼面が使われていた

韮崎を後にして甲府駅前へ。駅前には工事中で信玄の雄大な床几に掛けた銅像が見られなかった。「小作」でグツグツ煮える甲府名物「ほうとう」の昼食に舌つづみを打つや、間もなくバスは次

の「山梨県立美術館」に向かう。この美術館は各県がこぞって美術館を施設した先駆けになったもので、ミレーの「種まく人」「夕暮れに羊を連れ帰る羊飼ひ」他多くのミレー作品やバルビゾン派の画家作品が多い。特に「種まく人」は昭和五十三年開館当時に三億円で購入したと話題になった。

しかし私は以前から「ポリーヌ・V・オノの肖像」(二十三歳で長患いの末子供にも恵まれなかった最初のミレー夫人)が好きで、館内最初のブースに掲げられていたのは惜しい気がした。彼女の透明で健気なまなざしはいつも私の胸



山梨県立美術館

をうつ。

館内は呉ゆかりの画家の近藤浩一路、望月春江や川崎小虎の絵画、版画家の萩原英雄の作品も数多く展示されていた。

館外に出ると、レンガ色の館と真黄色の銀杏との美しい色彩調和は、この美術館の何よりの作品ともいえる光景に思えた。

午後三時美術館を後にし、織田・徳川連合軍に追われ、天目山で僅かな従者と共に自刃した勝頼主従の最期となった田野に向かう。

途中再び石井啓文氏のレクチャーを聞きつつ「景德院」到着。同寺は徳川家康が小幡勘兵衛に命じて建立されたが、当時「田野寺」と称したという。天保年間、弘化三年(一八四五)、明治二七年(一八九四)と度

重なる大火で諸堂は消失、僅かに火災を免れた山門が当時の姿をのこしているという。

朽ちた堂の裏に勝頼を中心に右に桂林院(享年十九歳)、左に信勝(享年十八歳)の墓碑が建つが、正面は何故か欠け落ちて武



景德院

田氏の末路を象徴するかの様に感ぜずにはいられなかった。ただ焼け残った山門と紅葉した楓、そして遠望する山並みが美しく夕陽に映えていた。

古戦場 滅ぶ古刹や 秋暮るる

午後四時半、晩秋の夕暮れは速く往路と異なり圏央道を疾走、談合坂での小休憩では、多くの人が旅の楽しみでもある土産を買いきみ、東名・小田原厚木道路を経た午後七時、予定通り小田原西口に無事帰着した。乗務員もさりながら先導役の飯田理事の緻密な時間配分に予定通り消化出来、その御苦労に深謝!

(平成二十八年十一月二十二日記
(スケッチ画も田中豊)

落穂集

◎本年の干支は「丁酉」です。丁は「伸び盛り」、酉は「完熟した状態」を表し、前向きながら矛盾も孕んだ年だそうです。六十年前の「丁酉」であった一九五七年はどんな年だったのでしょうか? 世界ではソ連が初の人工衛星スプートニクス一号を打ち上げて宇宙開発に一步踏み出し、わが国では東海村に初めて原子の火がともり原子力開発が本格化した年です。その後ソ連は崩壊し、原子力開発は岐路に立たされているのは周知の通りです。今年も将来を左右する大きな変化があるかもしれません。観智を結集した慎重な対応が必要となるでしょう。

◎小田原の一九五七年は、その前年に「銀映座」「中央劇場」「東映劇場」が相次いで開場し、小田原市内に八つの映画館が営業するという映画絶頂期で、まさに「完熟した状態」にあったといえます。これらを含めた小田原の映画館盛衰記は平倉さんの論考に詳しく書かれています。

◎本年トップは、威勢の良い一心太助のモデルとなった「鮑屋」さんに登場していただきました。今日の冷凍技術の進歩にはめざましいものがありますが、それでも小

特別賛助会員

紳士服の **アメリカヤ** 手打^まうどん 小田原城趾前 田毎
 税理士法人 **報徳会計** のれんと味 **ぶるほ**
伊勢治書店 **ちん里う本店**
 ㊦ **かまぼこ** 割烹料理^{うなぎ} **鳥かつ楼**
 (株) **オクツ薬局** 和菓子 菜の花
 ㊦ **小田原ガス** 杉崎茂法律事務所
小田原報徳自動車 平井書店
かまぼこ籠 清 株式会社 **報徳**
かみやま小児科クリニック 建築金物 (株) **星崎仲吉商店**
興電社 学生専科 ㊦ **マルク**
COMTEC コムテック株式会社 曾我の梅干 **美の政**
さがみ信用金庫 (株) **アルファ**
塩辛・かまぼこ

謹賀新年

会員の皆様 本年もよろしくお願ひ申し上げます

平成二十九年 元旦 会長 平倉 正

小田原史談(年四回発行)
創刊昭和三十六年一月
会創立昭和二十年七月

禁無断転載

振替
年會費 普通會員三千元
〇〇二二〇三六四三三六
小田原史談会

小田原史談会ホームページ URL <http://odawara-shidan.hustle.ne.jp/>

小田原史談会

検索

田原の魚の新鮮さは何ものにも代えがたい魅力があります。そのことをもっと内外にアピールしていきたいと改めて思いました。

◎計報があります。昨年の暮れ、杉山理事が急逝されました。杉山理事は長年にわたって活躍され、特に史談会セミナーが今日のように事業として定着するために大変尽力されました。また、本会報でも現在も「忘れられた地名」の連載でお世話になっていきます。謹んでご冥福をお祈りします。

◎小田原史談会では、小田原で長年受け継がれてきた店、仕事、技、場所などについて、それを現在支えている方のお話しを直接聴いて記事にするという、庶民の身近な歴史探検を本年もさらに積極的に行っていくつもりです。御期待下さい。会員諸氏の情報提供を切にお待ちしています。(編集子)

「小田原史談」原稿募集

論考・紀行・証言等の原稿をお待ちしております。お問い合わせは左記へ。

南足柄市関本七三〇六

電話 〇四六五七三〇八七九

荒河純